日本書紀傳 十五卷一

和書
一〇五二二號

二十五

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (44)
函號 特 85 1

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
内閣文庫
宮内省図書寮文庫

日本書紀傳十五之卷

神代上第十三　瑞珠盟約章　穂積重亂　謹撰

於是素戔嗚尊請曰吾今奉教
(コヽニスサノヲノミコトマラシタマハクアレイマウケタマハリテミコトノリヲ)
將就根國故欲暫向高天原與
(トスカリナムネノクニニカレマラシタマヒシマシテノマ并テ、タカマノハラニト)
姉相見而後永退矣勅許之乃
(アネミムトアヒマミエマツリテノチヒタフルママカリナムトキニカヒルストノリタマヒケレバスナハチ)
昇詣之於天也是後伊弉諾尊
(マ并ノボリタマヒキニコヽニアザナギノミコト)

神功既畢而靈運當遷是以構
幽宮於淡路之洲寂然長隱者
矣亦曰伊弉諾尊功既至矣德
亦大矣於是登天報命仍留宅
於日之吹宮矣少宮此云倭柯美野

此ハ八洲起元章の結ハして四神出生章より兼たる所あり偖此ハ於是より仍留宅於日之吹宮矣と云迄の文ハ上章の終ハ置べき所なれども此間ハ黄泉国の事又御身滌の事の條に有ゞ故ハ其章ハい難置ゝりけれバ此章首ハい有り然れども素戔嗚尊の天上ハ昇詣させ御在し坐む事を御父大神ハ請奉ゝせ給へるハ其御許有ける事を書させ給へれバ素より上章ハ抱る事あゝざれバ此瑞珠盟約章の初ハ被收たるあむ甚と尤ある事ありける然れど此ハていい登と考ゝれたる所ある事云も更あれバ天報命の事を專要其ハ唯此中間ハ在し事ゝ心得べし偖俗の御紀を

読む輩あゞ正書耳を固取て一書をバ異傳として屑
さも考さめれども此れ至りていい正書一書を合せ兼
て結ばれたり此れて撰者の然る御心用も何も伺得
られて御紀一部を一聯の古傳と見成し奉る可き心
掟を定む可き所れあるむ有ける然るいい先陰陽二神御
天降の事ハしも八洲起元章の正書れいハ無く却りて
其第一、一書れ天神謂伊弉諾尊伊弉冊尊曰有豐葦原
千五百秋瑞穂之地冝汝往脩之西賜天瓊戈と有り次
れ蛭子淡洲を生坐し所れいハ故還復上詣於天具奏其
狀時天神ニ太占ト合之乃教曰云ニと有りて如此く

其天降坐し初れて其神功を建給ふ間れも皇祖天神
の詔命を請奉らせ給ふ事古事記も此と同ト趣れ傳
へたり然れが必しも其皇祖天神の御許れ報命し給
へる事次きを此れ伊弉諾尊功既至矣德亦大矣於是
登天報命仍留宅於日之少宮矣と有て是れて始終相
契通て條理甚明らかあり然りと雖も斯文却りて一
書れい牧ずて此れ列ぬられるむ撰者の心用ひ
れて彼此の差別を立ず正書一書共れ參伍錯綜で読
通る可き事を微されたりつる者ありけゝ是乃此章耳
らず摠て御紀の文を読奉る人の知らでハ得有まじ
き事ゞと世の痴人共の説れ正書ハ朝廷の御傳れ

り一書ハ家この古記ありなど事も無げに云めれど
も假令一書ハ家この古傳ありとも如此く止事無き
大御正史に載くれたる上ハ同じく朝廷の正記なる
に非ずや且其並載らるるハ同事の重復なるに
略きあるも被為可けれ御紀の
全部に係て論ふより外有心うずず又四神出生章に
對せて稽るに故其父母二神勅素戔嗚尊汝甚無道不
可以君臨宇宙固當遠適之根国矣遂逐之と有て其に
ハ父母二神と有り然るに此の文に於是素戔嗚尊請
曰吾今奉敕將就根国故欲暫向高天原與姉相見而後
永退矣勅許之乃昇詣於天也と有ハ上章より兼続き
たる文なる事云も更なるを此に父母二神と何
とも載くれざりけれハ今知べうざるに似たりも

亜も此ハ必伊弉諾尊一柱の御計くひにて有ける
其ハ上文に次て是後伊弉諾尊神功既畢靈運當遷云
云亦曰伊弉諾尊功既至矣德亦大矣云云と見えて伊
弉冊尊の御事を一所なれに被記ざるハ上章第六一書
第九一書第十一書等に已に黄泉国に幸行し御事有
て其神の結ハ其處こに委しきに故に正書ハ其に任
ねたりし者なり故上章に父母二神と有るに此
に伊弉諾尊一柱の御名耳を被挙たるなりけり若て
此末に素戔嗚尊の天照大神に對奉給へる御言に但
父母已有叢勅將永就字根国云云と申給へるハ上
章に父母二神云云と有を指て宣へるなり然れども
実に上章なるも此神逐の事を父母二神に係て云

る傳共ハ誤りて伊弉冊尊の黄泉国に入御在し坐て後伊弉諾尊追幸行し其より還坐し御身滌の事有ける其程の事ある由已に傳ハ巻九十四丁に論へるが如し此ハ上章と此章との文脈に就て説を成せる者なり然れハ上章第六の一書に天照大神素戔嗚尊等を伊弉冊尊の生成し奉らせ給ふとハ為ずして伊弉諾尊の御身滌に因て御生坐る趣に傳へたるハ古事記も共に誤ある由傳ハ二十に説を起して次に傳十三百七十二丁四百五十丁傳十四四丁に註せるが如し然れども素戔嗚尊神逐の御事ハ其一書に是時素戔嗚尊年已長矣復生八握髭髯虽然不治天下常以啼泣恚恨故伊弉諾尊問之曰汝何故恒啼如此耶對曰吾欲從母於根国唯為泣耳伊弉諾尊恵之曰可以任情行矣乃逐之と有る是正説なるが此に伊弉諾尊一柱の御計らひなる上ハ彼と此と其趣全く一に帰めり然れハ上章正書より直に此に続ける文の如くにハ有れども伊弉冊尊の御事ハ一書共に結びて此ハ伊弉諾尊一神に抱かりたる文なる事を明らめ暁る可くなむ有ける古事記も右に引る第六の一書に異なるざるあり其ハ傳十巻五百十五丁のり以下其文を註す因に引るを此に再引て次に論ふ可し

○於是ハ上章の終に故其父母二神勅素戔嗚尊云こと逐逐之と有より受て下に言を起す辞なる事誰も知れるが如し然れども右に云る如く其

より後の黄泉殿身滌殿の條に有れば此の所は其正
書一書を該羅(オシクル)めて於是と兼ねる為れば御身滌の事
竟て後を云り然るは彼四神出生章の較略いしも一
神の生坐るあり三のは海川山野を生坐るあり二のは冠
其御子等の勅任しの事は珍御子等の御生坐るあり又
の生坐るの就て條この事共有り五のは其事の就て
伊弉冊尊黄泉国の入坐るあり六のは伊弉諾尊追及
て其国の入坐るあり七のは其国より還らせ御在し
坐て絶妻之誓の御事有り八のは御身滌の御事有て
大凡八段の分れて有り故第六一書と古事記とを
対せ考へて此章の及ぶ時は於是と兼ねる所右の如
く無てい合ざる者あり○請曰八麻衣斯多麻波久と訓べし古事
記の以下為請將罷往之狀参上耳と有る請をも記傳
の麻衣佐年と訓れたるの倣へり備此字を被用たる

（宝鏡開始章第三一書の頃者人畜多請と有るも麻衣世行乍と訓附）

公を海宮遊行章の許比麻衣佐久と有て同ト意なれども本の位の此

ハ後宮職員令内侍司ある尚侍の下の奏請と有る義
解の謂奏而請其報と有る意と同しうる可し此ハ昇
天の勅許を請奉らせ給ふ所なれば此下の對曰
諸與姉共誓第二一書の吾與姉共立誓約宝鏡開始章
第三一書の請姉照臨天国自可平安と有る請を許
布と訓来れる其とハ別あり其ハ下百ハ十丁の云べし名義
扨の請の許布とも宇久とも祢賀布とも須こ牟とも
宇氣多麻波留とも那流とも訓て麻衣須とハ無れど
も其趣の従ひ訓べきあり雄略天皇御紀の○吾を夜
請ず賜罷と有る請ハ宇氣多麻波留と訓り（五章第六書吾與姉共立誓約従此於根国と有るも共の訓附た）
都加礼と訓れたるも良ハしうず阿礼と訓べし古事
記の此の御事を僕者欲罷妣国根之堅洲国と見え

又問賜僕之哭伊佐知流之事故白都良久僕欲往妣国
以哭ゝ有る此三の僕字を古く夜都加礼ゝ訓来れる
を記傳七ニ十四丁の師云此をも和礼ゝ訓べし皇朝の古
人ハ直き故の虚言為ねバ貴人の自夜都加礼ゝ云
が如きハ無し然るを僕ゝ書るハ漢籍の倣へるなり
彼国人ハ畢下を甚しく書れど皆虚言ゝ云れき信
の然る言なり此の僕も書記の吾ゝ有り其宜しゝ
云れなれども此の吾をも然訓来れるを思へバ已く
紀記を被撰し當昔のも然る事違ハ有来つゝむ其ハ
儀制令の化皇后皇太子以下率土之内於天皇太上天

皇上表同稱臣妾云こゝ云事の見えたれバ此令の御
定の盛の以行ハるゝ時勢の牽れバ僕字ゝを用ひ
又吾字をも其意の被用たるなゝ可けれども甚ニ異ケ
しゝる御事なり其ハ素戔嗚尊ハしも天照太神ゝ共
の益坐て二柱御祖神すゝ珍子ゝ稱挙奉ゝせ給ふ計
の貴き大神の御在し坐す御事ハ申すも更の此の
瑞珠盟約の御事の因てハ掛まくも甚も可畏き皇御
孫尊の大御祖ゝ御在し坐す神の坐れバ日神の亜
て甚ニ貴く高き大神なり大宝令なる御定を古の所
して僕ゝ訓奉ゝむ事甚可畏し此の吾字を被用た

る任み正しく阿礼と訓奉る可き者あり名義抜み吾を和礼又伎美又於能礼と云訓有れども夜都加礼と云訓も無しと雖も其訓も無みハ非ず海宮遊行章第五一書み吾子孫八十連属恒當為汝俳人其茅渟一書み若治我者吾生児云こと有るど火酢芹命の帰伏給ふ時の言ありハ然も申さる可きを豊玉姫命の言みも不用吾言と有ハ妄云こと多く用ひたるも同トく其ハ天孫み對ひて申給へるあれハ格別ある事ありし和名抜微賤類み奴僕唐令云奴和名豆布祢人之下也和名夜豆加礼侍従人也と有て異しき祢あり嬖和名夜豆古女之畢祢也と有て名義抜此み同じ孝徳天皇二年御紀みハ奥能夜都古と訓り名義抜みも奴を豆布

祢と有ハ粒兄と云事み小人と云事みや又夜都古と云事みて夜都加利とも有り又同抜み臣と云訓有ハ右み引る儀制令の唱ふる字み夜都加礼と云訓も同抜みも僕字み夜都加礼又夜都古又和礼又都加布又都久又豆布祢あど云訓有り然れども甚く微賤しき祢みし有れハ君臣主従の上みハ云べし父子兄弟の間み云べき事みろざれハ令の御定を以て神代を証ふ可うずある乎況て素戔嗚尊の御上み於てをや因み云ふ中世ハ漢様の移りて皇后皇太子あどの御上みハ似てしも著ぬ臣妾の祢を用ひて謙遜み過させ給へる鎌倉の右大将家よみ以来ハ人臣として憍敖ある詞を用ひて天朝を掠のなる事多在り正大中正ある上津代の風こそ甚偶ハしき事ありけれ○奉教ハ上章第十一一書み受勅と有と同じく訓来れり今も其み従ひて教字を美許登能理と訓べし偖此教ハ上章み其父母二神勅素戔嗚尊云こ固當遠適之根国矣遂逐之

○又遊仙窟み僕を也余を也下官を也夜都加理と訓り理名み謂ゆる礼の轉あり

○宝剣出現章第二一書み素戔嗚尊乃教之曰云こ二神隨教云こと有も此み同ト

と有て此下ハ父母既有勅將永就子根国と有る是
あり但此を父母二神共ハ関係ハせ給へる状ハ被書
たるハ誤ある事上四丁ハ已ハ論へるか如し実ハ其
第六一書ハ伊弉諾尊怒之曰可以任情行矣乃逐之と
有り古事記も右と同じく故伊邪那岐大御神詔速須
佐之男命何由以汝不治所事依之国而哭伊佐知流尓
答白僕者欲罷妣国根之堅洲国故哭尓伊邪那岐大御
神大怒詔然者汝不可住此国乃神夜良比尓夜良比
賜也と見えたる此神逐の御命ハ其奉り給へる教
ハい有ける名義ハ教字を能理とも哀斯布とも世
忘年とも多加志とも訓て有り上ハ詰白

と書されたるハ合せて教
字ハ被用たるハ有ける○奉ハ字氣多麻波理と訓
べし儀制令ハ奉勅の字有り公式令詔書式ハ宣奉行
と云事有り宣ハ詔書を受て宣ハ奉ハ其を奉りて
人ハ付るなり行ハ其を施行ハ謂なり此と同じく御
父大神の教を奉りて根国ハ就給ふい即其事を行給
ふ御事なり故奉字ハ其意を以て書させ給へりけむ
たて主君の命令を奉りて施行ハ人を奉行と云も右
と同じ意なり傳十四巻三十三丁ハ云る受の下考合
す可○將就ハ次ハ永退矣と有ハ同じく御母神の坐
處ハい有れども根国ハ大地の根底ハ在て卑しき国
なるか故ハ云ハて高天原の方ハ向とも昇詣とも

ハ又天ハての御言ハ
も父母已有敬勅將
永就子根国如不
奉仰相見吾何以
敢去と申給へと共

△宝鏡開始章第三ニ書ある御言ハ諸神逐我ニ今當永去ても衆神處我以根国今當就去ても有り偖此の事をバ

云る其反あり△古事記ハも此を欲罷ニ妣国根之堅洲国ニ有て合へり記傳七ニ十六丁ハ化て麻加流とハ黄所より退去るを云ふ故ハ去る所を尊ニ趣く方を異しむる時ハ云言あり参ハ黄所へ向行を云ふと反對あり云と云ハたるが如し大殿祭詞ハ参入罷出人能匿比所知志御門祭詞ハ参入罷出人名字問所知志大祓詞ハ大川道ニ持退出氏

続紀第五十一詔ハ明日者参出来仕年止待比賜間ハ休息安麻利豆参出来須事波無之帝天皇朝子置而罷退止聞者云ニ太政官之政子波誰任之母加罷伊麻須云ニ天皇朝子暫之間母罷出而休息安母布事無云ニ忽朕朝子離而罷麻之婆礼云ニ美麻之大臣乃罷道母宇之呂軽久心母意太比ハ念而平久幸久罷止富良須信止之云ニて有ると何れも参と罷とを對へて

但此詔ハ永ニ大臣の薨ぬしをも罷と云る

ハ傳十四巻百二十七丁ハ云り万葉二吉備津采女死時の歌ハ楽浪之志我津子等何罷道之川瀬道見者不怜もて詠る猶麻加流て云例ハ万葉三十六ハ百磯城之大宮人乃退出而遊船ハ波又十七丁ハ去出榜来舟者又三十一丁憶良等者今者將罷六ニ十五丁ハ食国遠御朝庭ハ波等之如是退去者七ニ丁ハ百師木之大宮人之退出而九三十二丁ハ今谷蟆国ハ退而十一十九丁ハ如是許難御門ハ

△景五十八詔ハ能登内親王の薨ぜし事を聞ハ子置豆罷麻之奴止聞食豆云ニ罷麻佐年道波平幸久都ニ年事無之云ニて有ると是なり

△又三十六丁天離夷部ハ退

退出米也毋十八三十ハ許登字波毘可敬利末可利天
十九二十二丁ハ青柳乃細眉根字咲麻我理朝影見都追二
十十七丁ハ氣布能日夜伊田豆麻可良武ゑど見え中古
の物語書ハ罷出給ふ事云事の許多有も皆右の格ハ
同ト偖此の就字を工章第十一一書ハハ就候之て訓
て有り由久ハ參て罷てその間ハて役て此て然耳勝劣
の無ハ云語ありを名義抜ハ就を那流とも都伊
比ても年加布ても表波流とも都比尓とも須那波知
ても訓て由久ても麻加流とも見えざれども然云べ
き語勢あり其所ハ依て訓て求む可し ○暫ハ素戔嗚尊の志し給ふハ工
章第六一書ハ吾欲從毋於根国と宣へる如く其国ハ
永ふハ止住給ハむ御心ありければ高天原へハ唯姉

第一一書ハ唯欲典伊相見只当暫来耳と有を見合す可く又此

四十ハ須臾羽蟻待又五十三相見者須史意者左京本六書
五十六四十ハ須臾之間也見牡鹿十五ハ雷鳴須臾不見者如有
る此等ハ何れも志麻斯と訓べき所ハ
るあり又十三ハ暫文吾者志枝沼鴨と暫字をも然訓
せなり假字ハてハ

尊ハ奉覲ふ為ハ取急ハ昇詣ふせ給ふ耳とゞ有けれ
其所ハ住着せ給ふ御心ゑ〳〵ざるゝ故ハ暫とハ申給
へるあり下ある永退出と有ハ合せて想像奉る可し
偖此字志麻斯とも志麻良久とも訓べき申ハ此ハ共
の方然る可し古事記海神宮段ハ我押流其船者差暫往將
有味御路伊豫風土記ハ大穴持命云こ宿奈毘古那命
而漬浴者暫間有治居然詠曰塩干之時者寢哉ゑと有る共ハ
志麻斯と訓り万葉十五三十一丁ハ之末思久乍伊毋我目
可礼氐十八六ハ奈呉乃宇美尓布祢之麻志可勢十九
四十五丁ハ之麻之久毋別等伊信婆ゑて有り言義志麻ハ

次間と云事にて斯くも斯久とも活きて其形狀を云
るあり（予出羽国に年頃通ひて其土人の言を聞くに江戸あたりに唯今又は暫なぐ用ふ語を曾麻と
云るは次間と云意なるにや又志麻良久とも云べし
邊鄙にい斯る古言共多在り）
続紀第五十一詔に暫之間罷出而第五十八詔に暫
久間も忘得（茅之自美奈毛）云こと有わが万葉二十五に
乃間も須臾毛不通事無又二十丁須臾者勿散乱曾五四十に須
臾毛余家久波奈之尓九十八に須臾者家帰而又二十
須臾者落莫乱十一六暫不見恋又七暫君目不見又八
人事暫吾妹十二八暫毛心安目六十四二十一に思麻
良久波祢都追毋安良年辛ゴ猶有べし此志麻良久

の志麻は上に云る如く良久の流を延なるにて有の
意にて次う其間の有を云なり（万葉の今訓に志婆斯
も右の如く假字にて書る何れも志麻なれば其に従
ふ可し名義抄に暫を志婆良久と訓れど又志婆良久又加理曾茅又阿加良
佐麻なる有り）○向に本に麻韋理氏と有れども同トくに麻
韋傳氏と訓べし記傳七二十六丁に参に黄所へ向行を云
ふ此に出る方を畢しめて趣く所を尊む時に言なり」
る有が如く罷の反對なる事已に上九丁に註るが如し
此下に乃昇詣之於天也と書され古事記にも然者請
天照太御神將罷乃参上天」と有と同し所なれば必麻
韋傳氏と訓べき所なるなり其は其高天原にしも世

ハ比然く尊き御国あるハ然る物ハて其を所知看す
日太神ハしも八百万千万神の上ゝ御在し坐て天地
の間ハ二無く貴く高く御在し坐せバ然しも崇ハへ
奉ゝせ給ふ可き御事ハあるに有ける宝鏡開始章第三一書ハ素戔嗚尊三
曰諸神逐我我今當永去如何不典我姉相見而擅自径去熟迺復扇天扇国上ハ詣于天ゝ有り此ハて日神を崇
重ミし奉ゝせ給ふ御心を明ゝ去可し古事記御天降段ハ故後木花之佐久夜
毘賣参出而白又海神宮段於是海神之女豊玉毘賣命自参
出白之云ニ故参出到也又朝倉宮段令持百取之机代物参出
貢献あど有り方葉六二十五丁ハ山多頭能迎参出六十八
二十七丁ハ夜保許乍知麻葦泥許之登吉二十三丁ハ以波

比弊等於枳豆麻為民枳麻之子と有あど右ハ同じ向を
麻葦流ハ用ひる例ハ外ハ見當らざれども参向とも
熟する字あれば有る可し古事記御天降段ハ故仕奉
御前而参向之侍と見え白檮原宮段ハ故参向而頭白
あど也有り備麻葦傳と云ハ中昔の言ハ初瀬詣御嵜
詣あど云如く参ハ
出向ふを云あり　○妹を那泥能美許登と訓ミ下ハ
阿妹と有も同じ事ハて次ある吾弟ハ對へゝれ方
継体天皇元年御紀ハ廣媛生三女長曰神前皇女仲曰
茨田皇女次曰馬来田皇女と有る長を伊呂泥とも阿
泥とも那泥とも有て其那泥ハ私記の訓ある由あり
然れば汝妹と云言の如く見えたるハ古事記白檮原宮段
ハ神沼河耳命曰其兄神八井耳命　那泥汝命云ニと

有りハ兄をも云語なりけれハ汝姉の略なハ非りけ
り故思ふに那泥ハ汝根なりて其兄をも姉をも通ハし
て此を根とし本とし自ハ其枝末なる由を以
て汝と親しと作も尊ミ崇めたる称なるあり記傳
二十四十四丁に那泥ハ人を親しと尊ミて云称なりと云
と云れども委しくハ委しくうずと虽も粗相追近し又其所に
引れたる万葉四五十丁に己が女子を指て名妣と云る
ハ今も田舎にていハ己が子の事を兄とも姉とも呼ふ
事ハ親しミて云中にも其底子に分ち云あれハ尊む
意味有に同じ九三十二丁に過足柄坂見死人作歌に小垣

内之麻矣引干妹名根之作服異穴と詠るハ父　妣毛
妻矣毛將見跡思乍往祁牟君者と有る其妹に對へて
妹と云るにて名根ハ其作者の方より云るなれハ上
の格に異なるず又記傳に伊呂泥も女に限る如くなれども安寧天皇の御子に常根津日
子伊呂泥命と申す有れハ此も男女に度る称なりと
云れたる実に然る言なり然れハ右の二の泥共に根
の謂にて其義異なるず○相見ハ相麻美延奉理氐と訓に下にも
如不典姉相見吾何能敢云々見え第一一書に唯欲典
姉相見只為暫未耳第二一書に吾所以未者実欲典姉
相見亦欲軟珍宝云こ耳又宝鏡開始章第三一書にも
如何不典我姉相見而擅自径去歟云こ若不典姉相見終

不能忍離云々あゞ有る是れて俗に貴人の目通に出て見知るゝ事を目見と云ふに同じ麻美曲の麻美ハ目見れて目見れ元所知るを云なり万葉七卷二十五丁に吾見之児等之目見者知之母と見え源語桐壺卷にも目見なども甚弱げなれと有り天照太神と素戔嗚尊ハしも共に伊弉冊尊の御腹より生出させ御在し坐て親しき御兄弟ハ坐ませども天照太神ハしも已く高天原に琴奉ゝせ給ひしかバ素戔嗚尊の甚幼稚く御在し坐し間に別れ奉ゝせ給ひけるに依て今御心の欲為る任に御母国に根国に就坐す事に定り御在し坐しゝど其太神に相見え奉ゝせ給ハずしてハ得しも放離

りて罷往坐し難きハ然る物にて古事記に然者請天照太御神將罷と有る如く御父大神の御許ハ奉ゝ〳〵せ給ひ乍も猶日太神の御許をも請奉ゝせ給ひ受張て根国を所知食し御在し坐ゝる所思し成ゝせ給へるに心ゝ有るかゝ（上に引る如不共姉相見吾何能敢為と也）何不共我姉相見而禮自經去歟と有る御言共に露計りも私の御心御在し坐さるを考へ然れども此ハ天地を預鎔造給ふ皇祖天神の成し給ふ者なる可し其ハ四神出生章に所見なるが如く右の二神ハしも伊弉諾尊伊弉冊尊の共議ゝせ給ひて何不生天下之主者歟と

（ふ可き者なり委しくハ傳三十三卷四百十二丁に云）

詔給ひて生成し奉らせ給へる珍御子ゐハ御在し坐
せども天照太神ハ自然ゐ六合を照臨ゐせ給ふ可き
御徳坐が故ゐ已く高天原ゐ送奉らせ給へれバ素戔
嗚尊ゐむ天下之主者と申す任ゐハ當らせ御在し坐
けれども其始右の如き由ゐて生奉らせ給へる御子
等ありけれバ其神一柱ゐて所知食べきるゐハ天
下を事依されさせ給ひても猶御心ゐ落居させ給ハ
ざる事ころハ有けゝ御母神の根国ゐ入坐し後ハ
頻ゐ其国ゐ從ひ罷給ハむ事を强ゐ乞給へりけれバ
御父大神も御怒の餘ゐ遂ゐ逐ハせ給ひけれバ素戔

嗚尊の願給ふ如く成れりと雖も其ゐても猶御心滑
の為させ給ハざるけゐて終ゐ天上ゐ參升らせ給ハ
むとハ所思し定れるゐて此ゐ依て日神と御誓の間
ゐ皇太子天忍穗耳尊を生奉らせ給ひて天下万国を
天地と共ゐ所知食べき天津日継ハ定らせ給ふ御事
成て前ゐ二柱御祖神の何不生天下之主者歟と詔給
へりし御言の徴信ハ立りけり者とゞ推量奉られけ
る此ハ予が御紀ゐ傳し奉るゐ就て第一ゐ主とし
て受張りゐ説ゐて古来の識者と同ト云ざる所
ゐて其論甚長けれバ傳ハ巻より以来次ニ云るが如
し斯れハ此神と日神との御間ゐ於て様こ御子違ひ
の事共有しゝも事の運の神隨ゐして其所ゐ後行
て終ゐ御誓の事ゐ及べるゐれバ共ゐ皇祖天神の御

心ありてハ思定むるみ至れる者ありうし○後ハ先の對ありこれてハ先向高天原典姉相見而後永退根国兵と云むが如し神世七代章ハ天先成而地後定ハ洲起元章第一一書ハ陽神先唱曰云こ陰神後和之曰云こあり有る類を以て明らむ可し然れば先ハ今出ハて其事の今成出るを云ひ後ハ去竟ハて其末の行極る所を云言ハ有ける此ハ常ハ誰しも用ひ馴たる事あるハ註を下さむ事ハ殊更めきて所思ふ所ハ却りて目易き言ハ心の知り難ハ訓り此を以て云あり○永ハ終ハ往留り御在し坐べき根国ハ就て云あり先ハ高天原の方ハ暫く宣へる其反ある者あり偖下ハも將永就子根国と有り又室

鏡開始章第三一書ハ我今當永去云こ自此永帰根国兵と有る此二の永ハ比多須良尓と訓り共ハ比多を本と〻して成れる語共あり其ハ万葉五三十ハ直土尓藁解敷而十二十四ハ赤帛之紀裏衣十三二十ハ當土足迹貫十八二十ハ多知波奈能成流其實者比太照尓、伊夜見我保之久と有ある物を交へずして其事一向ある をあり源氏榊巻ハ比多美知ハ云〻と有も側を見ずして一筋ハ思込むを云ひ須磨巻ハ比多於母年伎と有ハ一方を指て漸ハ趣く氣勢の止らざるを云と聞え御幸巻ハ比多尓云こと有ハ本より一向あ

ヨを云あり　又常木巻の艶ある歌も詠ずして
りりしうハ云こタ霧巻の明しの聞えすると詠
けれど夜べの羅ハ比多夜碁母理の情無
一向の籠り居るを云あり文選の固護と有を注の精
心専一視て有をも右の引る須磨巻の合せ思ふ同し
右の血土の血も名義教の多陀尓又多陀知尓と訓て
純ハ専て訓を同しくし當ハ常の誤と云説も有れど
も麻佐志又麻加須とも訓て專當とも連ね云字あれ
ハ何れも專一ある義ハ離る可うず然思ふの水の
漬るを比多留と云も水て專一然れば比多布流六一
成る謂ふて右の同語なり
経と云ふ同しくして一道を的當ふして行経る謂ふ
て此ふ永退兵と有ハ古事記訶志比宮段の向一道と云語
の有ふ然しも異なるざるなり万葉十一二十七ノ云と
物者不念斐太人乃打墨縄之直一道二と有る一道を

履仲天皇五年御紀ふ抜絶

直一向二と云換ても其義同ときを以知べし伊勢物
語ふ真芳野の田面の鴈も一向ふ君ゞ方ふゞ寄るを
鳴ふるを見え源氏桐壺巻ふ甚一向ある云こと有ふ
同じく前後を顧ず唯一道ふ倚る意あり又葵巻遠生
巻ふゞふ盗人ふゞ云ふ一向る意云と玉蔓巻ふ今日
ハ甚一向ふ強て侍ひつる云こ海賊の一向ふ云
こふゞも有る皆其意を轉ろハし用ひなり者なり
又比多須良も一進の意ふて其も異なるず春秋ふ大
字を訓せ又一天又平天の字をも世ふ然訓来れるを
も思ふ可し　太平記ふハ只管とも作り此も物の專一
ふ行迫りて他を顧ざる由を以て用ひな

る者あり又濕空を
も然訓む事常あり○退兵の二字を合せて麻加理那
年登申給閑者と訓さめば勅許之への続き宜うずず
退を麻加流と云例は大祓詞の大川道に持退出仕と
有は更あり上十は引る万葉の歌共に多在り名義被は退字
を志理叙久とも麻可流とも加閑流とも夜年とも伊
曽久とも於登須とも訓て有れば正しく麻加流の當
る字なるあり○勅許之は許須登勅給比伎と訓べし許とは
其請奉らせ給ふ所を許諾はせ給へるあり此は御父
大神の然神逐はせ給ひしうでも素戔嗚尊の天上は
参向ひて日神に請して罷るむと申給へる事信は其
所謂有が上は其神の天上は昇詣給ひて日神の御計

退給を麻祁多麻布と訓

▽海宮遊行章第六ノ書は第許諾因易之又安閑天皇元年御紀は詔曰可矣あり有る許諾を也可を之申流独と訓れかる是あり

らひとして彼天下之主者を定め御在し坐は至らむ
事を御心は思知して許させ給へる幽深ある神
量の御在し坐て許させ給へりと為む伺奉るれける
古事記は然者請天照大御神將罷乃参上天と耳有
て此勅許の御事は無きを唯此御紀の傳へる事実は
合て甚尊く有ける上ある相見の下は註せる事共を
許と云字は中古なり多く用ふ字なるは依て被用な
るあり通證は南史褚翔傳勅許爲と有る由書せり
偖此の許字は上は請曰は照應へて被書たる者あて
神功皇后五年御紀は冀云と而請爲皇太后則聽之と
有と同し格あり凡て他より請ふ所を許容るを田流

須て云事古言あり武烈天皇御紀歌に瑜屢世登耶泳
古万葉三十四丁に真十鏡磨師情乎縦手帥又三十八丁気之緒
尓念師君乎縦左思者又四十三丁真十鏡磨師心乎縦者七十七丁に勢能山尓盾伺妹之山事聽屋毛打橋渡八五十三丁
に宮尓毛縦賜有今夜耳將飲酒可毛九二十二丁に男神毛
許賜女神毛千羽日給而十一四十一丁に人之將縦言乎思
將待十二三五十八丁に思乱而敝鶴鴨あゞ有る何れも同ト
源氏桐壺巻にも罷出あむと為給ひても暇更に許さ
せ給つゞと有り凡て禁しめ制めたる事を緩へて其
心の縦に従ハしむる事を聽許さい云あめけり万葉十二

に梓弓引見縦見とも梓弓引而不縦あゞ引と弛と並
ゐを思ふ可し軍の圍を解を釈むを云ハ應神天皇
九年御記に便靴横刀以敵尓美内宿祢遂動殺兵天
皇勅之令釈と有る此に同ト儲右の如く種々の字共
を用たる中に許ハ名義抄に由流須又許登知流又阿
多布又由豆流又波加良布あゞ訓ミ縦をも聽をも赦
をも釈をも共に同
に由流須と訓り儲傳十五百二十四丁に已に註るが如く
古事記に故其伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也と
見えたるハ此御政ハ未淡路なる磐駅盧嶋の本宮に
還らせ御在し坐さりし間の御事なる可し此に其
事を被載ずして虽も次文に是後と異ひて其より以下
ハ淡路之洲にての御事耳なるを以て諦に然通えて
あむ有ける若て此ハ素戔嗚尊の日神に覲奉らせ給

（又傳十七段に云ふ如く此昇天の御事を勅許させ給へる御裝束は羽明玉神をして八坂瑞々之曲玉を金鵄給へる御事の有るを思合すべし）

は云為の御父大神の申し請て其勅許を受奉らせ給ふ事文の所見なるが如くあり然れども猶深く此を思ふに此国土に在て有ゆる八百万千万神も皇も縱（オホヤケマ）に高天原に昇詣る事は必しも出来まじき御定共の有て其は下の所見なる幽宮に長隱れ鎮り御在し坐す伊弉諾大神の御聽許を兼奉らずては成まじき事此の御事實の上を以て推量り奉らるる事ありうし猶下（三十八下）に云を考合すべし全くは信しがたき書ぶり有れども東方朔が十洲記に方丈（明）在東海半心西南東北岸正等云に上事是群龍所聚有金玉瑞璃之宮三天司命所治之處群仙未欲昇天者皆往此洲受太上玄生籙云ことを有に少し思寄る事有を以て云ありて猶下に次に云を待べきあり

○又（玉垣宮說に因て特に大神大御子物語故に參上来云と）

○乃は勅許を奉りて其間を置すして直に乃の義なり○昇詣之於天は八洲起元章第一一書に故還復上詣於天具奏其狀と有り此神の御事は宝鏡開始章第三一書に扇天扇国上詣于天と有り然れども昇詣又は上詣を字の任に訓たらむは直に漢文訓に成て此方の言語の狀に非れば古事記に右の八洲起元章ありとも即共參上と有り又此ありとも於是速須佐之男命云に乃參上天と有に依て昇詣を倒反して麻章能煩理坐伎と訓べし（又其記御天降段に故建御雷神返參上云に又（又水垂說に故大毘古命更要參上請於天皇云云如是記參上西後奏云と）朝倉宮段故已直參上而仕奉あり万葉

六、三十六丁わ参昇八十氏人乃手向草恐乃坂尓あゞ例多
く又源氏物語わも参上(マイボ)し給ふ云々と云事多く有
り同ト事あゞら上参末氏あゞ云時ハ此方の言語の
格あわゞも上参笠伎々ハ云べう〳〵ざる此差異を
熟思ふ可し詞ハ文選註わ謁也と見え参出の音便わ
て常わ麻宇豆て訓ム字あわゞも此ハ唯参の意わ用
ひたる者あり○是後ハ口訣わ素尊昇詣於天之後也と有る
如し偖此の是後すり以下五十九字ハ八洲起元章わ
亘りて其結文なる事已わ巻首わ云るゞ如し若て其
素戔嗚尊わ勅許(ミヨトすれセ)せ給ふ較略ハ淡海の多賀わ御在し
笠し間り御政わして是後と云より以下の事ハ磯馭
盧嶋の本宮わ還り御在し笠る其間の御事寞と見る

可し彼記わハ淡海わ在し〻其宮處を被記たわゞも
此幽宮の御事と登天報命の御事と甚と大切しき二
件を脱せるを御紀わハ其多賀宮わ坐し御事を記し
漏されたる耳と云有けれ右の二件共詳明わ傳りて
始終わ通りて不足ぬ事無く彷彿しき事無きあゞ然
ずりわ大御正史の徳わ有ける猶右の淡海の多賀耳わハ非ず二
柱御祖神共わ国とわて任給へりし宮都と思しきも
彼此考得たるも有わゞも其ハ傳十巻より次ニ事の
因ニわ云るをたての大義わ抱ハ〻さるハ御紀わも漏たるを思わ可し偖是後と有る其
云ニの事ハ素戔嗚尊の天上わ参上坐しより後わ
て保食神の許わ降笠しより先ある事知らる然れ

ハ其以前ニ天上ニ於テ天照太神ト素戔嗚尊ト天安河
を中ニ隔テ誓約の御事有リ其ニ因テ其二柱の御誓
の間ニ男御子ハ生坐るを天照太神の日足し給ひて
天下を所知看す可き皇太子ト定奉らせ給へり其
時を以て神功既畢ハ宣ハせたりけるし然るずて
ハ皇祖天神の詔命の任ニ国土万物ハ形の如く生成
し給ひしかども其国土を紛御す可き大君主宰も御
在し坐ざるニ国土を空虛ニして神功既畢ト詔ふ可
き理無く又長隱れ給ふ可き謂れ無きを思ふニ其御
誓の事ニ就て先ニ何不生天下之主者歟ト宣給へり

し御事を竟し給へるニ因て登天報命の御時ニハ及
ハせ給ひけむを思ふ可し御此ハ予か思寄る任ニ
ず上章第十一書ニ亦名日夜児尊ト申して天より
保食神の許ニ降坐し時ニハ已ニ伊弉諾尊ハ国土ニ
御在し坐ざる趣ニ聞えたるハ已く幽宮すニ日之次
宮ニ参升り坐し故ありて又日神の磐戸隱の時ニも其
事ニ次うも抱つ〳〵ハ日之次宮ハ天日
あるあるあるあ

成是多陀用弊流之国賜天沼矛而言依賜也と記され
て其修理固成の四を摠括て此れハ循と約言へる其
由傳七巻五丁に已に註せるが如し偖右の言依賜也ハ
其修理固成の御業を寄せ奉給へるなれば言ハ借字
にて事あるゝ其事即此を謂ゆる神功の功ある事申
すも更なり（其例）四神出生章に授以天上之事と有を其第
六一書に可以治高天原也と有て事と治と相通し給
へるを以知べき者なり天孫降臨章第二一書に所見
なる顕露之事神事なゞの事も皆右と同例なるなり
斯れば許登ハ此典の義にて物と（典に）相離れず身と（典に）相離

れず事と事と典共に相離るまじき謂の言なりけり
傳十三巻に説る事解之男神又大事恐男神なゞの名
義を考へ大物主神を大物代主神と申す其對に事代
主神御在し坐す由縁をも思ひ合さば其思半に過なむか
しも云るハ続紀第一詔に高天原に事始而云こ此天
津日嗣高御座之業云こと有ハ高御座の（御）事ハ高天
原に始めし御業なりと聞く可き文なるなり（ふて沈御天降以来の古語）傳四十五
九に引り高橋氏文景行天皇の詔に大倭国者以行（ナス）
事（ワザ）負名国也と有る行事ハ那須和邪と訓べき所にて
事（ワザ）とハ各自の職業を云るなれば此の神功亦其に引
合せ見る可き所なり然れば和邪ハ吾（ワザ）為にて其皇祖

天神より賦命り奉る吾業ハ（ワガナリ）一も人ゐも傳へ〻〻ず
吾も棄べ〻〻ずして世の極て生の涯り為（ナ）して成し
盡す可き由の言ありけり（名義抜ゐ事字を許登と有ハ本おりゐて和那（ゐ）と訓）
て常ゐも多く和邪（ゐ）も用ひ又重復ていい然れば此ハ
事業ゐ〻も云語ゐて相近きを思ふ可し
皇祖天神の大御命以て二柱御祖神ゐ事依し授奉ら
せ給へりし御業を事託させ給へるを申すゐり偖其
始二神ゐ依され奉給へりし御事ゐるを女神ゐ已ゐ
黄泉ゐ罷向坐し素戔嗚尊ハ天下を所知看ず御在し
坐ば中にゐ神功既畢て申す可き所ゐハ非るか如し
て亟も陰陽二神の下津国て上津国てゐ絶妻之誓を

建て散去（アラケサカ）り御在し坐す御事ハ一も必右の如くゐ〻
でハ天下国土の相有（タモ）つゐ〻き所由有る事ゐて其亦
二神の世て共ゐ立給ふ神功ゐ一有ければ何ゐハ遺
漏る事の有べき又素戔嗚尊（此時ハ一も）天ゐ参上り御在し坐て
日神て相共ゐ御誓の事を為させ給ひて天下国土を
所知食す皇太子天忍穂耳尊を相成し奉〻せ給へる
項ゐひありしゐば先ゐ何不生天下之主者歟て宣給
へりし御言の信も立りければ御心の隈に残る所無
く御心足ひゐ此ず（ゲ）神功を既ゐ畢させ給へる時て思
ゐし定めて偖幽宮ハ構〻むて其御心掟ハ為させ御

△至り極ずり違ひ竟る由あり口訣ハ神功既畢者国土成定諸神出現万物具建也と云ふハ然る言あり畢の例

在り坐ける為ム實ハ諸ある御事ハハ有ける尊の御事ハ於てハ古来諸家の云ふ所と予が見る所とハ日を同じうして論ふ可うざるの如き説有て已ハ傳十巻十二巻十三巻ハ委しく説置るを今茲ハ合せ説て曉る可し又此時を指て彼瑞珠盟約の後と云事ハ二十一丁ある是後の傳ハ已ハ云る事あり○既畢ハ次ハ功既至矣と有を對せ考へて其趣を曉る可し△宝鏡開始章第三一書ハも今則奉覩已詫て有り右事記ハハ既生国竟更生神とも有り既ハ盡の義ある由傳十三巻九十九丁ハ云り畢字名義抜ハ都伎奴とも都比尓とも衰波流とも許登基登久とも有り其を衰閑と云ハ凡て物の終を尾と云るを猶其尾ハ尾経ハて行過し経たる義ある可し万葉

△又此表閑の奉き事ハ傳二十二巻百十七丁ハ云り

五三十一丁ハ事字還日者十八三十一丁ハ許登字波理可敝利末可利天二十九丁ハ安里米具里事之字波良波ある畢の例ハて言ハ異あれども三五十九丁ハ結而石事者不果四四十一丁ハ愛寸事盡手四長常思者十六丁ハ人子之事藻不盡十八四十九丁ハ伎美尓可多良武已等都奇米也毋ある有る果も盡し相近き語共あり然れば此ハて神功を既ハ果し給ふとも盡し給ふとも相換て見て其事の至り極ずり給へる御事を伺ひ奉る可し△○霊運當遷ハ字ハ抱ハずず阿都礼給布と訓来ればハ信ハ愛なき古語あるハて次ハ徳亦大矣と有ハ並びて甚尊し然るハ雄略天皇二十三年御紀ハ遘疾弥留を夜来

比志阿都志礼と訓ミ其傍ノ四字を引合せて阿都延と云訓を添へ又顕宗天皇元年御紀ニ羸弱をも亦阿都志礼と訓たるを釈の訓ハ夜都礼と有り又持統天皇元年御紀ニ篤癰を阿都延毘登と訓るあるニ依て此ある癰も熱癡（アツシレ）の義ニして近頃説る人共の有ハ甚ミ事ハ時き故と云ふ〻餘ハ有ける癡言ハる者あり同言ハ有れども其意別あるをも得辨知ざる僻事ある者をや疾病ハ阿都志礼と云も篤（アツシ）所知（シラレ）らるこを云あり阿都延ハ篤国の功れるあり然るを誰も見て怨篤く見え知通證ハ強ハ熱癡又熱困の義として役四神出生を章第四一書ある悶熱懊惱の所ハ引付たるハ大あるの誤あり源氏桐壺巻ハ甚阿都しく成行きとも年頃の

阿都（アツシ）とハ馴給へれ（レ）ど有も唯の病の篤き状を云ひ標零巻ハ頼もしげ無くのミ阿都伊給ふ（フ）と有も唯病の篤き耳ハして熱の故阿都志礼給布と云ハ徳義ハ非りける者をや

亦大矣の大ハ當りて阿都ハ続紀第一詔ハ貴支高支廣支厚支と疊重ね云るが如く伊弉諾尊の太く厚く事竟へ盡極め給へる神功を申せるハて次ハ徳（キサト）と云る是あり志礼ハ所知ハて其神功を次ニ建させ給へバ建させ給ふが任ハ其御徳の著明く天地の内ハ充（ミチ）満りて其事依し給へり〻皇祖天神の御許ハても其神功の成整る事共を委曲ハ所知食して其品階を進めさせ給ふハも有べく況て他神ハどより何程ハ仰

奉るわらわけむ其一事を以て申さゞ古事記を見る
に其成坐し初めは唯伊邪那岐神と有り御身滌餝に
は伊邪那岐大神と有り其次には伊邪那岐大御神と有て其末
に至ては打任せて唯大御神と耳申させ給へるあり
此即徳の大に成らせ御在し坐るが故あり此を以て
阿都志礼給布と申せるにて千名の五百名に世に
知らわさせ御在し坐す事を疾病の事に云を持込て
説僻め奉りて可うらむや甚切息衝うし身毛も弥立
てゞ所思るうし其上霊運當遷の字にも疾病に係
を知わが此あるは御徳の篤く所知わさせ御在
し坐を云あり疾病に云は入に篤きを所知るあり霊

私記に此四字を加美安加利万志奈年止須と有を取れるか

傳世一十に注るが如く

運當遷に又側に神上理坐那年登須と云訓も有り其
は次に登天と有に同じく報命し給はむとて天に参
上らせ御在し坐むと等るを云あり此は伊特諸大神
幽宮を淡路国に構給ひて其大御霊を留させ給ひ正
身は天上に還上り御在し坐す御事あり天孫降臨章
海宮遊行章神皇義運章を始て紀中に崩字を神上理
坐須と訓るは此大神の御霊を留め顕身あらわし
て神上り御在し坐しるは別に顕身は国土に留り
坐て御霊の天上に神上らせ給ふ事にして謂ゆる死
を云あれども其事らの同じきが故に言も亦一に

る者あり然るハ此大神の天降坐し始ハ世人の生るゝが如く又此ハ神上り坐すハ至てハ世人の死る終の如くして死生の理を究盡す事此一段ハて至れりゝ云べし万葉二十七ある日並皇子尊殯宮之時歌ハ天雲之八重掻別而神下座奉之高照日之皇子波と云て皇御孫尊の天降坐し始と日並皇子尊の生坐し事とを兼て云ひ下ハ天皇之敷坐国等天原石門乎開神上に座奴と云て其崩御し御事を云述たるハて右の此の古傳ハ本據て詠りし者あり右の神上に座奴を一云神登座尓之可婆と有り阿賀流を能煩流と云換たる身あり借此の靈運當遷ハ右ハ云る如く崩御の事ハい非りけれど

其を移して死る事ハも云い役鎮火祭詞ハ伊時冊尊の御事ハ火結神生給氏美保止被焼氏石隠坐氏云に有ハ顕身ハ石隠れ御在し坐るハて崩御し謂ハい非りけれども後ハい死る事ハも借用ひて石隠ると云ハ如し此を以て努に崩御ハの御事を思誤る事勿れ死るハ崩ると云事ハ天孫降臨章ハ就て説べし纂疏ハ靈運當遷者年運遷替也と有れども唯字ハ泥と給へる御説ハて委しうず通證ハ薛道衡老子碑至道靈運神功自然後漢黄香傳功満當遷列仙傳尸解神遷と有も字の出所を徴せる耳ハて更ハ此ハ由有ず非

○幽宮ハ加久理能美夜と訓べし顕宗天皇二年御紀ハ弥野磨我俱利底弥曳禰賀謨阿羅牟推古天皇二十年御紀ハ訶句理摩須阿摩能椰蘓訶碕万葉五十六丁ハ波流佐礼婆許奴礼我久利豆十四九丁ハ宇麻具多能祢呂尓可久里為十五十二丁ハ由布佐礼婆久毛為可

久里奴あゞ古言に加久理と云例あり幽は幽深の義なり名義抄に幽を布加志又波留加奈理又冨登理又加須加奈理又冨能加奈理又加久須又許煩須又登良布なゝ訓り

備二柱御祖神の高天原より天降り御在し著て始て顯国に御立給ひて同宮に共住給へりしに彼天柱国柱と見立給へる八尋殿にて即磯馭盧嶋是なり黄泉国より還り御在し坐て御身滌の為に先禊門を指て幸坐るを思ふに女神の神避り御在しなる後も猶其宮を本宮として住給へりし事知るべし古事記神逐の段に故其伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也と有り然は其頃は近江に在しを神功既畢させ給ひて皇祖天神の御許に復命しに神上り坐むとして其本宮に還らせ給ひ其より天浮橋に乗らして出立し御在し坐むとて為給ひて殊更に其御霊を留めさせ給はむ幽宮に構へさせ給へるにて天下に神の御霊を鎮る神社を構造る本縁此に在り此宮乃神名式に淡路国津名郡淡路伊佐奈伎神社名神大と有る是にて此文の如く大神の御自始て構造らせ給へる宮都なる者なり然るを記傳七巻に顯御身は終に天上なる日之次宮に留り坐て淡路に多賀と云は其御霊の鎮坐す御社なり」と云はるは允當なるを其次に然るを構幽宮と有は後に彼天上の日之次宮に擬らへて彼洲に御社を建たるを加此は語傳へたるなり」と云はるゝは何の事ぞや此文に大神の自構らせ給ふと有を曲て後の事に取成す

みハ及ふおしき事ありの斯計の程を取違へる大人みハ非れども此ハ御天降の事み結ぶ文あるを思漏されるよりの出来れりし物換ひみてゞ有ぬ可き此幽宮を構へ給へる類例猶有り宝剱出現章第五一書み然後素戔嗚尊居熊成峯而遂入於根国矣と有公（其あり以前み）正書み遂到出雲之清地云こ於彼處建宮と有る須賀宮ハしも其后神と相共遘（クミトニミトリ）合し給ハむ料あるみて二神の八尋殿み同トさを風土記み熊野大神と見え神名式み意宇都熊野坐神社名神大と有を思ふみ其地の形勢の隈としき謂あゞみハ有べうゝず其所み御霊を留めて隠坐し所謂み依て熊野とハ云ある可し久麻と許母理とハ近き語あ

ある可し宝鏡開始章み幽居字を許母理麻須と訓るを合せて熊野神社と申せるも幽宮と申すみ然しも異（カクリミヤ）ゆゝざるを思ふ可く有む其ハ風土記飯石郡須佐郷の下み故我御名者非著木石詔而即己命之御魂鎮置給之處と有を以て幽み入うせ給ふみハ必其御霊の鎮坐す社を自定め置せ給ふ上代の風あるを覩る可し又天孫降臨章第二一書み高皇産霊尊乃還遣二神勅大己貴神曰云こ夫汝所治顕露之事宜是吾孫治之汝則可以治神事又汝應住天日隅宮者今當供造云こ於是大己貴神報曰云こ吾將自此避去即躬扱瑞之八坂瓊而長隠者矣と有る大己貴神の顕身ハ正書み今我當於百不足之八十隈將隠去矣と申給

へる如く常世郷に隠坐す為に其御霊を留給ふ宮處の事を天神の勅許し給へる文に日隅に潜まり匿るゝ由にて天日隅宮と云ひ幽宮と云ひ彷彿たり自構ゝせ給へるも他より造立給へるも幽世に入せ御在し坐す其際に當りて御霊を留置給ふ理に於ては少しも異る事無くあむ有ける　右の常世郷に隠坐と云ひ大倭神社注進状に引る御紀に依り其は海宮を云ひも非ず外国を云ひも非す謂ゆる神仙の秘区にして八十隈是なり委しくは其傳に就て説明ゝむ可しむ　右の如く伊弉諾大神の幽宮に始りて素戔嗚尊の熊野宮は更なり大已貴神の天日隅宮共に天上に在れ根国に在れ八十隈に在れ顕国の神功既畢給ひて各其志し給ふ方を指て出坐むと為る時に必其御霊を留めて天下国土に其御恩頼を幸はへ給ふ可き御為なり此乃古の道なり然れば顕身の世の人皆の行ふ所も應に此道に依て命の全けむ涯りは皇御孫尊の大御民なれば其大御趣に従奉り功を建て績を積て徳を大きく成し其餘慶を子孫の八十連属に傳ふ可き基を定め置て年老い身衰あれば得去め道に赴く者にして其魂は後命しに日之次宮に参上る事には有れども其家の霊屋には其子孫を守護る霊を留め幸はふ心構を能為し置く可き事

みあむ有ける但此ハ吾輩の上の定めのころ有けれ
掛まくも甚も可畏き天神御子ゐ〳〵の所授き御上み
ハ御一柱み一所の幽宮を構〳〵せ給ふ〻も何計の御
事りハ御在し坐む爭て古の道を神習ひ習ハせ御
在し坐む御勢み立復〳〵せ御在し坐む大御世も欲得
と胸甚 ふり りてあむ中古より人臣みても勢有る家に
為み社を建て世の覚え甚目ざましき造み持奇傳き
つゝ世中あるみ近頃の風として天皇の御ハ泉涌寺
と云み葬奉り般舟院と云ひて佛様の御祭共を仕奉
られ作も其異しとを為ざる耳うハ又其勢も有り公の
御為み忠やる臣りし臣等の為めハ皇子等をさへ
僧法師の狀み裏し給ひて其扉きみハ全成奉るあむ
時勢てハ云あグう餘りみ倒しまある御事あめける
其徒ハ常み漢好みて神ハ非礼を享ずと云み非ずや

倭靈屋と云事の物ハ見えたるハ榮花鳥邊野巻一條天皇の皇后宮の崩させ給へる所ハ鳥邊野の南方ハ二町許去て靈屋と云物を作りて築地ゐと築て此ハ御在し坐せむと為させ給ふと有り

然ハ其爾ハ給ふ神ハ世み功有る忠血の人等あ
れハ如何ハ心苦しく思給ふ〻む但此ハ千載の後の
人み驚うし事あり 倭此幽宮の御事り物み所見たるハ履仲
天皇五年御紀み秋九月乙酉朔壬寅天皇狩于淡路嶋
是日河内飼部等從駕執害先是飼部之黥未差時居島
伊弉諾神託祝曰不堪血臭因以下之兆云悪飼部等
黥之氣故自是後頓絶以不黥飼部而止之と有り此ハ
天皇の大御狩場み大神の御靈も幸行て共み遊び御在し坐
けむ〻〻み斯る御託ハ有けるある可きが彼御言み
吾則當産日將千五百頭と盟給へりし御心みハ黥(メサ)く
事あゞハ縱や其氣ハ臭〻〻ずとも忌悪し嫌ハせさ

せ給ふ可き御事ありうし又允恭天皇十四年御紀ハ
秋九月癸丑朔甲子天皇獨于淡路嶋云々然不獲一獸
於是蹈止以更卜奥嶋神嘗之曰不得獸者我之心也亦
石海底有真珠其珠祠於我則悉當得獸爰更集處之
白水郎以令探赤石海底云々於海底有大蝮其處光也
諸人皆曰嶋神所請之珠殆有歟蝮腹字亦入探之云々
則割蝮腹真珠有腹中其大如桃子乃祠嶋神而蹈之多
獲獸也々有を欲述義ハ引き天書ハ十四年行幸淡路
祠伊弉諾大神々々有ハ信ニ難くも有れども右ハ居嶋
伊弉諾神ゝ有を合せ見るハ此の嶋神ゝ正しく其大

神ハ為ル御在し坐ける神威の甚こ可畏く御在し坐
す御事此等を以て明らめ奉る可し　信ハ此大神ハし
祖神ハ御在し坐せバ斯る事の禍福も何も其大神の国土万物の御
御心ハ依る事ハ有けゝし然ハ殊更ハ其御心を
取て崇敬ひ奉る可き宮ある可し　偖右の二度共ハ
同ト九月ある可し先ある日ハ十八日ある後ある日ハ十二
日あり今此宮の御祭ハ例ヲして九月九日清和天皇
ある日ハ右の時こそり其月ハ祭末ある日こそり
実録ハ貞観元年正月廿七日甲申ハ京畿七道諸神の
進階總て二百六十七社ありし其最初ハ奉授淡路国
無品勲八等伊佐奈伎命一品々有も餘社ハ例無き
御崇敬あり然れども上古ハ無き事ありれども當時
世ハ被行たりし宮号を奉らせ給ハざりしこそハ遺

ムヲ有リ又淡路薬遣新羅之使主波多朝臣廣足之方也ヲ有ヲ神異方ハ多賀社祝人寄乃方奈ヲ里

憾き事ありけれ備日事記ハ伊弉諾尊亦坐淡路之多賀也と有れば此ハても古すり多賀社とい申せりしありけり大同類聚方ハ伊毋薬私云淡路多賀社祝等所傳ヲ見え今も現ハ郡家郷多賀村と云ハ御在し坐を証と為べし　凡て此大神の宮を多賀と申す事ハ傳十巻五百二十四丁ハ云るが如く式ハ載れる所獨近江国犬上郡多何神社二座と有る耳あらず遠江国麁玉郡多賀神社陸奥国名取郡多加神社宮城郡多賀神社行方郡多珂神社名神大と有ると文字の異ハ有れども皆同神なり然るハ記傳ハ右の旧事紀の文を疑ハれども已ハ大同ハ出来りし書ハすゝ然記せる耳ありすず今多賀村と云ふと中ニハ後人の取称へたる事と思めくしゝぬ者なるやも　又津名神社とも申ける ハや大同類聚方ハ淡路薬と有て其下ハ私註云此方

傳淡路国津名神社云ニ按津名者伊弉諾尊之宮趾也云ニ津名神司中臣好根之傳文載之と有り又民支薬淡路国津名神社〇〇〇六津奈之〇〇〇所傳也とも有て津名神社を正しく伊弉諾尊之宮趾也と有らゝハ右の淡路伊佐奈伎神社より外ハ引合ふ所無きを思ふ可し和名抄郷名ハ津名郡津名（都奈）郡家（久宇布）と有て別ありて亟も今多賀村を郡家郷と云て津名郷と云ハ廃れるを思ふハ古其邉ハ津名ありしハ廃れる後ハ郡家の属邑と成ぬるハこゝろ有けの故考るハ郡家ハ元津名の郡家の在し所なるを津名郷より（ハ郷ハ郡ハ郡ハ）

割て一郷(別)に置れつるより其本亡びて終に郡家郷に
に合する事とは成け〳〵し然れば古は津名郷の多賀
村なりし事論ひを待すあ也偖其多賀村の東南に並
へるは志筑郷なり和名抄に之都支と註せるは静城(シヅキ)
の義にて彼(其も)幽宮に寂然長隱者也と云ふ由有る名と
聞えたれば津名と云ふも故有る事なるべけれども其名
義未思得ず但和名抄の之都奈と誤れるを鈴屋翁の
ふる所に依て其誤る事著ければ今改て引り其王
子村と云ふ神名式なる志筑神社立せ給へるを若一
王子と云て熊野権現と云傳へるも多賀神社に由
有る神に御在すめり偖土人仲野安雄が著せる淡路
常盤草と云物に右の津名郷の事を今角川村と云や
其なるべけれども多賀村よりは二里許も隔れる

が上に右の大同類聚方あるに合ざれば諾ひ難し因
に云ふ伯家部類に引る神祇官永万記に淡路一宮と
有を今も国人は
然唱ふる事なり此幽宮の御事に就て高説有り師す
赤縣太古傳(を見る)に漢武内傳なる王母の語に天皇於是方
文之阜孝理命之室と云事有り其天皇氏と申すは伊
弉諾尊の漢名なる事を明されたり方文之阜は東方
朔が十洲記に方丈州在東海中心云々上真是群龍所
聚有金玉瑠璃之宮三天司命所治之處群仙求欲昇天
者皆往此州受太上玄生籙仙家數十万云々と見えて
東海中心と有は決く我淡路洲なりと云れたるは信
に然る事なり其は西蕃より東海と云は皇大御国の
事なるに淡路洲の東北に大日本豊秋

津洲周回り西南の伊豫二名洲と筑紫洲と重続れて
ハ信ハ皇国の中心とも云べき国ハ此嶋を指せる事
決くあるも理命之室ハ固書ハ十州記ハ有金玉瑠璃宮
有ける三天司命所治之處と有る是あるか理命と司命と同
義ハて人の生命を司理し給ふ幽宮の名ハて古事記
伊邪那美命の一日絞殺千頭と申給へるハ伊邪那岐
命宣ひ勝て汝為然者吾一日立千五百産屋是以一日
必千人死一日必千五百人生也と有ハ符合へり然れ
ハ理命之室金玉瑠璃宮ハ是幽宮ある事著明き由ハ
云ハたるも寔ハ然る事ありて但神祇官坐ハ神の中なる生産日神足産日神玉
積産日神と申すも此大神ある由ハ云ハたる説共當
らず予案しき説有て已ハ祝詞講義ハ云り又和名抄

ハ津名郡育波郷以久波と有を思寄るハたハ必ども
姓氏録ハ的臣武内宿祢男葛城曽都比古命之後也と
有る其氏人ハ由緒有るある可し今も育波村ハ八幡
大神の旧社有り栄給ハるを思ふハ必生産日神ハ思
合す可き所無きか如し又群仙未欲昇天者皆往此州受太上玄生
籙と有ハ神仙の昇天するハ本より日之女宮ハ上る
事ある時ハ必此大神の勅許を請奉る事ある御定ある
が故ハ其昇天す可き者の昇天を欲せざるハ又此土
ハ留る可き生籙を賜りて長生久視する由と通えた
り右ハハ群仙ならぐ云へれ要ハハ皇国の仙人
なれども古ハ殊ハ寿長うりけれが然云るなり猶上
二十丁ハ云る事共を考合す可し此一條ハ全く師説と

同しうるざる所あり（凡て西蕃より仙と指て云者何
いふ史記の始皇本紀に徐市等上書海中有三神山名
曰蓬萊方丈瀛洲仙人居之云々と見え後漢傳に
言秦始皇遣方士徐福將童男童女数千人入海求蓬萊
神仙云々徐福遂止此洲云々土宜禾稻紵麻蠶桑云々
有白獸青玉其山有丹氣温暖冬夏生草如云々人性嗜
酒多壽考至百餘歳者甚衆世之相傳有教方家云々論
曰荀政之所謂東夷以柔語存風異乎三方者也云々夷
義存焉仲尼懐憤以考九夷可居夷疑其西子曰君子居
之何陋之有亦徒有以云々と有るを志に皇国の状に
て壽考多き者を仙とハ云るなり義楚六帖にも日本
国云々秦時徐福將五百童男百童女止此国云々有
山亦名蓬萊云々至今子孫皆称秦氏云々有金銀山有
松檜名花軟草云々と見えたり然るを却て神仙の
霊地に住あらず餘に處所有と思ふて皇国の外にも
仙を求る輩の有ハ浅ましき事あるすや彼土にも
心有るハ孔丘も乗浮浮海と云ひ魯仲連か臣蹈東海
死なんと云る此幽宮の説の成れる項にひ柱叢重ずり

昆命虛中有增城九重云々登之乃神是謂太帝之居衆帝所自上下高無景呼而無響蓋天地之中也々

云遣せけるく傳六四十八丁礒馭盧嶋の説に彼土に昆命
ゑ云ハ此言を漢轉に轉訛れるなる可しと説れ又天
柱五岳云々云ハ（其東極の天柱を擬種なる者なるハ餘の四柱）も此の名を及ぼして云るなるむと云
れなる実に然もと思しきに就て考るに太古傳盤古
紀に引れなる河圖括地象河圖始開圖なるに昆命山
為天柱為地首云々氣上通天地之中也上為天鎮横為
軸云々其山中應于天之最中蓋帝之下都聖仙之所集
神物之所生云々有ハ中岳の事にて山海経淮南子
等に所見なる（北極直下なる）鐘山の事にハ有れども（其も擬昆命なる我か）直に昆命の礒
馭盧嶋よりして帝之下都ハ移せるなる可ければ直

の帝之下都い淡路の幽宮ある事論を待す然わば幽都と云ひ密都あと云も同ト所ある事云も更あれば此帝と云ハ天皇太帝ゐて即我伊弉諾大神を申奉れるあり」と云るハ此わ符合へる説あり然れい西南北の天柱わも然る玄都ハ有べきが此幽宮わ本著ゆる者ありけり此わ擬わ右の文ハ盤古紀わ有てハ叶ハず三皇紀わ牧む可き所ありけり其盤古氏と云るハ高皇産霊尊神皇産霊尊の漢名ある由師の考得られたるう如しる虽も其神ハ天上わ坐て国上わ降坐し神わ御在し坐ざれハ然る下都の有べくも非れば右等の帝之下都幽都密都を天皇氏わ符合るを以て淡路の幽宮と定むる事必しも強説と云ハ云べ[illegible]ずあむ○構ハ都久理氏る訓べし古語拾遺わ以斎斧斎鉏始採山材構立正殿と

と見え万葉十六十五丁わ夕附日指哉河邊尓構屋之と有り例ハ古事記わ速須佐之男命宮可造作之地求出雲国云こ其地作宮坐云こと見え大殿祭詞わ皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕礼流瑞之御殿万葉一十一丁わ吾勢子波借廬作良須又二十二丁吾作日之御門尓又二十九丁通作家尓七十三丁わ両者零借廬者作又三十四丁借廬之為跡造計米八方八五十四丁わ里木用造有室戸者あと見えたり構字名義抄わも舞加麻布と有ウ万葉九ハ右わ引るこの外物わ見當○寂然ハ今迫顕身わ御ざれども然訓べき所あり有て都久流と云訓在し坐て神功を顕国わ立させ給ひけるわ大神の大

八六丁ナセの奥浪邊
浪安美

八十一丁の鴨河向後瞬
靜

御身ハ日之次宮の神上〻せ御在〻坐て幽宮の ハ唯
御靈を耳留のさせ給へる給へるか故の云あり此大
神の限〻ず摠ての神の御靈を祠ひ奉る事を彼方の
附て鎭坐て云ひ此方の屬て鎭奉て云ハ此の同ト万
葉三 四十の安倍而榜出年尓波毋之頭氣師七二十二丁の
靜母岸者波者緣家留舍又二十五丁此山上之木末之於者
末辭之八十二十八丁の佐保河之河浪不立靜雲あり有ウ
備志豆年ハ下留の て物事の上の表ハ形ざるを云て
鎭ハ石 又靜菅あり水底の在て表ハ形ぬ物の云也常の
て沈も鎭も本同言 あり此より轉りて物の動の對へ

易繫辭の寂然

て安をも平をも書て共の靜と同ト く訓む事あり名義
枝の寂の字志豆加那理とも志豆麻理とも有り老子の
有物混成先天地生寂兮寥兮と有を翼の寂正也寥遠
也と有て名義枝の寂を志豆加又年奈志又比呂志と
訓なり又寂寞を韻會の無色也と云ひ文選註の靜皃
なるて寂寥も亦此の同し此の字を被用なる義是あり ○長隱者兵ハ長久隱理坐
伎と訓べし其幽宮の長しあへの鎭坐て再復世の顯
身を現ハし出給の事無きを云あり天孫降臨章の大
己貴神の事を今我當於百不足之八十隈將隱去兵言
託遂隱と見え其第二一書の吾將自此避去即躬投瑞
之八坂瓊而長隱者兵と有と事狀も語勢も共の相類
なる事あれば照し合せて事の趣を曉り明〻む可く

あむ有ける又其を出雲神賀詞ハ八百丹杵築宮ニ
静坐支と有り此を以て長隠と云ハ其宮ハ鎮坐す御事
なるをも暁めぬるし然ハ其幽宮を構へて給ひて其内ハ御霊の鎮り御在し坐す
事を然云るなるバエハ寂然と置なる故ハ長隠ハ古
此ハ必しも長隠有矣と有べき所なり
事記結盞段ハ至今鎮坐也と云事の有ハ等しく此長ハ
世と共ハの義なり又同記御天降段ハ故是以至于今天皇
命等之御命不長也の于今も此の長ハ同ト続紀第三
詔ハ天地共長典日月遠云ニ万葉卷三十三丁ハ年深長四
云者又従元長謂管不念侍者六二十六丁ハ短命乎長欲為
流又四十一丁松之枝結情者長等曾念ゑど將来を係て云

△三二十ハ天地共長久万代ニ不改將有

語あり名義抄ハ長を那賀志とも登冨志とも云訓有
ハ又御紀中ハハ此多布留ニとも登許志奈倍
ニとも訓て一向又ハ隠ハ宅舎ハ住む事を云義有り
常住の義とも考へり
推古天皇二十年御紀ハ夜須弥志斯和鐵於明著弥能
訶句理摩須阿摩能椰蘓訶礙と有も宮殿の内ハ御在
し坐を云あり祈年祭詞ハ天御蔭日御蔭登隠坐氐大
祝　詞ハ皇御孫之命乃　美頭乃御舎仕奉氐天
之御蔭日之御蔭止隠坐氐と有ハ何れも皇御孫尊の
瑞御殿の内ハ住せ給ふを申すあり春日祭平野祭等
詞ハ下津石根ニ宮柱廣知立高天原ニ千木高知氐天
乃御蔭日乃御蔭止定奉氐と有る此を神を社ハ鎮奉

る事を云るあるか右の隠坐とハ云されども此
続を以見れハ神社の鎮坐す御事をも然申せる事愈
明らうあるる者あり然れハ此の長隠者矣と有ハ長鎮
坐者矣と云の然しも異なるざるるう此ハ祝詞講義の已の説
なる事わてハ有れども此の亦次云ず〜てハ其義通え難き故の採出てあるを猶本書を見べし○亦
曰ハ先の幽宮を構ひ給ひて長隠り坐す御事を
云終めたるを此の其ハ其神上り坐す御行方の事を記
奉る其衆の置るのところ有けれ更の異説の謂のハ非
す此事を口訣の已く亦曰者始言遷化之地次明功典
昇天之事也と云るハ甚愛しき言わて已わも云るが

如く此ハ八洲起元章より係りて其結と成る文わて
神代上下巻の中の於て大なる段落と成る所なる者
あり容易く思軽しむる事勿れ人の生死と功の始終
とを知るの大段なり故此一段を力を極めて説得る
時ハ此を區分て何の章とも合すども更の渋滞る所
無る可き者なるなり此大段落の事をハ昔より心得
も一聯けの連ぬるふ故の神代の事実を詳の知り盡
し難く此を以て天下国家の用を成し行ふ可き神道
を明らめたる説を○功既至矣ハ工の神功既畢の事
を重復て懇到の申顕ハし奉れるあり但功字ハ此の
てハ美伊佐衰と訓べし次の徳と並云所あれハあり

宝剣出現章第四〇一書ニ所以綱五十猛命為有功之神顯宗天皇三年御紀ニ我祖高皇産霊尊有預鎔造天地之功あゞ有る功是あり、言義ハ弥進畢ニて物を務成して事畢る迄其氣勢の折挫けざるを云あり又此を轉して伊佐袁斯又伊蘓斯と云へバ其狀を云言とある事常の例の如し類史弘仁十四年十一月詔ニ務米志理伊佐子志と有り三代実録三十二巻記ニも務志万利伊佐子之と有ハバ袁の假字ニて意ハ工ニ出たる既畢の畢字の義ある者あり又伊蘓斯と云ハ伊佐子の功れるニて伊蘓斯ハ伊佐袁斯ニ同トス鈴屋翁説ハ功字ハ説文ニ以労定国曰功と見ゆ〇至公任足ある

ハ方葉十九四十ニ丁ニ曲後多良波之珍と云詞有り其と同ト言ふて

ハり天孫降臨章第三ニ書ニ陳其誠歎之至と有る至是ニ有り但此一耳ニて衣足ざ

ハ口訣ニ功既至典者成洲国備衆物也と云るハ今茲ニ云ふ至の義を重要る者と謂フ可ー

由傳十百六十四丁ニ已ニ云る如くニて有れども此ニ云ふ至ハ世ニ至り深き又ハ至り無き或ハ至ラぬ人あゞ其徳を論云ふ時の至是あるを用語ニ云るあり然れバ宝剣出現章第六ニ書ニ由吾在故汝得建其大造之績也と見え敏達天皇御紀ニも功字を伊多波理と訓るハ此の至より重りて至張の義ニて其至りの張弘ニ成る謂なりと聞えたり源氏葵巻ニ伊多波理望ミ」と云語の有も其勤功を申立て官位の昇進を求め望むを云ハバ此績の義ニ協へる者あり労字ニ当て伊多豆伎と云も至端の意あり徒を伊多豆良と云も至列ニて一向ニ至の違る所無きを云あり又伊多波志と云

至端みて差ふむ意あり然れが伊多某と云語い其往足を本みして云語ありけり又其み稚この差別い本
すめ有ぬ可き筈あり　○德亦大兵、い右み靈運當遷と有て厚所
知給ふの義あるか其事を殊更み反復さひ申顯ハし
奉れるみて此も御紀の地より云語あり德を伊伎冨
比と云い息覆の義みて神氣の盛りみして他ハ上及
ぶを云あり天孫降臨章第五一書み亦欲明汝有靈其
之威子等復起倫之氣と有を以て其言の氣み因れる
語あるを知べし此字猶樣こみ在り海宮遊行章第八
一書み故兄知弟德欲自伏事神天皇六年御紀み畏
其神勢共住不安皇行天皇二十八年御紀み今亦賴神

祇之靈借天皇之威雄略天皇四年御紀み是時百姓咸
言有德天皇也皇極天皇元年御紀み於是天下百姓俱
称万歳曰至德天皇あゝ猶多うり古語拾遺みハ權字をも然訓せたり功
の大あるも稜威の可畏きも權勢の盛なるも共み伊
伎冨比て其氣先の遍く覆ひ至及ぶを云言ある者み
り偖此德と云語ハしも海宮遊行章み兄云ニ自有海幸
幸此云佐知第云ニ自有山幸と云事の有る其幸み近き語
ある可く所思ひ佐知ハ狹道みて神みも人みも自然
み豊賦なる德みて此ハ父みも受べゝず子みも傳
ふ可ゝず神隨みして其事み任て能成し得る一の
業有を云あり右の如く此ハ吾一己み限る事あるを

以て其限有を以て字ゐハ幸とも徳とも書べけれど
も其意ハ狭道ある可く所思えなり又此ゐ因て其身
を立て道を行ひて其利用を得る事ある故ゐ幸の
意と成り又其功至り徳大ゐ成る時ハ天下国土の廣
きゐも其氣機の行渡きて遍く遺る所無きを徳とハ
云ありけり猶佐知の事ゐハ深き道理有る事ありが
ハい畫しつ可くも非れども大ら云ず此ゐ云のを
して猶立復りて傳て巻の首ゐ云る事共を見て此の義理
を明らの知らハ神習ひ奉る〇大矣ハ大伎尓坐世理
其奥所ハ極め盡す可くあむ
ま訓べし神武天皇御紀ゐ自叶祥夢大哉赫矣と有が
如し此大ま云語を多らハ言の上ゐ置て大為其ニて

云ふ常の事ゐて如此く語の下ゐ置く事ハ古書ゐハい
長ニ見當らぬ事ゐし漢風めらしく思ふ輩も有あむ
うあれども其も於冨伊那流あらじこそ有め此
ゐも然云べき語勢も何ぞうハ勿らざらむ今も俗語
ゐハ下ゐ著て云事も多在るハ古言の猶遺れる者と
こそ所思えなれ世の古学者共良も為れば已が不穿
勢ゐ似たる所有れば心任ゐ前り改めて物遠き訓を
施すを以て見識と思ふ様あれども中ニゐ心浅く思
の至らぬ者あり成る程右の至矣ハ易ゐ至哉坤元万
物資生と有を取られ此の大矣ハ大哉乾元万物資始
と云を取て書れたる所ゐてハ有れども語勢の然云
べき事ゐ至及てハ止事を得ざる者あるゐ非ずや文
字を離れて訓むて計り世ゐ成し易き事ハ無き者あり徳亦大矣ハ上二十八丁ゐも云

ハ云るが如く漸次ハ其御功の立行くハ隨ひて神階の追次ひて貴く高く成〻せ御在し坐て御德の大ハ盛ハ成〻せ御在し坐を申奉るあり傳十三四十ハ六丁ハ古事記より引出て註し奉る大事忍男神と申す神も大事ハ大功(オホコト)あり忍男ハ大畢(オホこと)ハて其至ハ極むる御德ハ就て稱挙たる名あるをも思合せて曉りつ可き者ありうし口訣ハ德亦大矣者清化廉行明理皓然也と云るハ何の事ぞや何ぞ客易く人間の上ハ云ふ清廉を此大神ハ當て說奉る可き又纂疏ハ此も德者得也得於心而驗之事と說給へれども更ハ此の義を盡させ給ハさる者ハあるも

○於是ハ御功既ハ至坐し御德も亦大ハ成〻せ御在し坐て遠る限無く政ごち給へる其度を此と外さず思ハし立し給へるあり○登天ハ八洲起元章又其第一一書ハ磯馭盧嶋を探得給へる所ハ降居彼嶋と有を古事記ハハ猶委しく於其嶋天降坐而〻云文有る其降(クダル)ハ對へたる登(ノボル)あり傳六三十ハ八丁ハ註せる事共を見べし紀中登天とも昇天とも作れ仁德天皇四十年御紀ハ阿梅珥能明刺と有り但天孫降臨章の經津主神武甕槌神の天降坐條ハ二神於是降到出雲国五十田狹之小汀と有て下ハ二神登天也と有て其餘ハ昇天と有を以見るハ天より降坐し神の返〻せ給へるハい登と作き何と無きハい昇と書く格と見内偖此天ハ登坐し事の狀を思ふハ先幽宮を構給ひて御靈を留め置させ給ひ其大御身ハ其天浮橋ハ棄て

人纂疏ハ報武功於天神也と宣へるハ実ハ然る言あり猶

ムかと思ふハ必然ハ非りけり其第一一書ハ二神降到出雲ところ昇天後命と有り通證ハ黄帝得之以登天と莊子と引き又素問ハ或而登矢張註謂治功成而天年盡

初て天降り御在し坐し著なる磯馭盧嶋の天柱より
こゝ還上らせ御在し坐しける其八四神四生章日神
を天に送奉らせ給へる所にも故以天柱挙於天上也
と有る天柱ハ磯馭盧嶋なる事已に傳八四十八丁に説明
めなる如くなれば有りし猶委しくハ傳六巻を見る可
事を云るハ北極並下なる中極の事なれハ有れども
我磯馭盧嶋を擬して其名を負せなるを漢土に昆命の
と訛れる由已に誓重が云る説の如し其文に登之乃
神是謂太帝之居衆帝所自上下云て云る、我点昆
命なる天柱ハしも右に云る如く皇神等の登降し給
へる所なれば此磯馭盧嶋の点説あるを名の同トき
ゆら彼擬天柱の事にハ
混入ぬる事と覚えなり○報命ハ加倍理許登申給比
氏と訓べし八洲起元章第一一書に天神謂伊弉諾尊

伊弉冊尊曰云云宜汝往循之云云二神降居彼嶋云云
と有り又古事記に於是天神諸命以詔云云二柱神修理
固成是多陀用弊流之国賜天沼矛而言依賜也と所見
なる皇祖天神の詔命に還答へ奉らせ給へるか故に
報命とハ云なり天孫降臨章第一一書にも昇天復命
に云云と云詔見四猶例ハ傳十四巻百八丁
に云り書叙指南曰還答之命
曰報命と有る由通證に見四偖此登天報命の御事ハ
しも天神の御命の如く国土万物の成具り足整へり
し有様を聞え上奉らせ給ふ御挙なりければ如何ハ
甚しき御事共なりけむ又其大御裳なるの美なく盛
なる事何計り尊き御事にて有けむ天孫降臨章第二

一書大己貴神国避條ハ大物主神及事代主神乃合ニ八十萬神於天高市師以昇天陳其誠疑之至時高皇産霊尊勅大物主神云ニ宜領ニ八十万神永為皇孫奉護乃使還降之ヽ有る此ハ報命ハ非れども其事ゞ〳〵の彷彿なる所あれば此を合せて又想像り奉る可き御事ハあるも有ける此事ハ限らず神代の御事迷いしも活眼を一部の書の中ハ活うして此より彼を思ひ彼より此を思得るハ非れば其正旨を見る事能ざるあり故思ふハ此ハ其より既ハ以前ハ大なる幽顕の異り目ハとゞ有けゝ其ハ風火金水土神等より始て其餘ハ在ヽ有ゆる二柱御祖神の御子神等ハ八百万千万神ヽ許多ハ御在せるも此ハ唯御霊を耳留の令置給ひて其正身ハ悉ハ率て天上ハ昇詣ゝせ御在ゝ坐けむヽ思ゆ若て此国土ハ後ハ素戔嗚尊の御子孫ハて主領き給ふ事ヽ成けゝ然るハ其神の降坐ゝ項ハ更ハも云す大己貴神の国土経営の時ハ二柱御祖神の御子神等ハ一柱ヽ亦も出交り御在ゝ坐ざるゞ故ハ御心の隨ニハ打振まひ給ひけるハ先心を着べき所ハ其ハ素戔嗚尊の奇稲田姫命を娶給へる時其父母神の申せるハ僕者国神大山津見神之子焉ヽ云事古事記ハ見えて其大山津見神ハ出坐ず又天孫降臨章第二一書木花開耶姫命を皇御孫尊の娶給ふ所ハて其時限ハ幽より出給へる状ハ見え又素戔嗚尊五十猛命を樹種殖給ふハ句ニ迺智神の係列ひ給ハざる

あるを見べし傳十二百十三七十六丁二丁にも云る如く凡火の神等ハ御父神に屬坐る神等ハ本より天上に坐べき事論無しと雖も御母神の御め給ふ金水土の神の如きも正身ハ天上に坐と思しくて古事記天石屋戸段に天金山之鐵と有ハ金山彦神の御名の縁あり又中臣壽詞大同本記あるにも水取の事を天上に請に上れるハ岡象女神天に在すが為なる可く又天香山ハ本より天上に在し山なり伊豫風土記に據に此顯国に在ハ天より零降れる山なり然るに神武天皇御紀に取天香山社中土と有て故号取土之處曰埴安と有ハ天上の

事に擬らへ給へる為ハ埴山姫神即天に在す證と成る者あり又宝鏡開始章に所見なる山雷神野槌神ハ大山祇神草野姫神の亦名なり皆顯国にて生坐る神等なるに石窟隠の事に預給へり但此ハ天上天下共に常闇の世と成にしかば祈申しに此顯国より上坐りしも云ハゝ云る可けれども伊特諾尊の軻遇突智神を斬給へりしに此顯国にての御事なり古事記に故所斬之刀名謂天之尾羽張亦名謂伊都之尾羽張と有る其神を天孫降臨章に天石窟所住神稜威雄走神と有て已く天に任着たる神に御在し坐ける御

事の狀なぞ合せて思ふに右等の神等の皆ゝ天
上に昇坐を指て何れの時とかは為む又御身滌の時
日神をば御門祭詞には天能麻我都比登云神と有り
伊豆能賣神を神名式には神魂伊豆乃賣神と有なぞは
天に田有る事なるぬに然冠らせ奉る可きざるを
思ふ可く又姓氏録を見るに天神の部に被收たるは
多くは二柱御祖神の御子に御在し坐るなぞを思ひ
考るに何神の正身も天に留坐る御事なるべし何奉
られる然れば鎮火祭詞に妹妹二柱嫁継給氏国能八十
国嶋能八十嶋を生給比八百萬神等を生給ふ有る限
の八百萬神等は何神も特別に常給ふ御功の任に国
土に幸給ふ御霊を留置し御在し坐て顕身は伊弉諾
大神と共に天上に神登り御在し坐し着て皇祖天神

の御許に参給へりしを大神はしも日之次宮に留宅
給ふ其項の事ありけるし天照皇太神の天石窟隱の
御時に招奉るむとして神集ひ侍給へりしが其より
以来（其八百万千万神共に）永ふるに皇太神に仕奉るして天日の大御国に
常しへに任給へる者なり祝詞に高天原に神留坐須
ゝ云は斯る時より申し初たる事にて有けむ又今
此幽顕を見（顕はし出）たるに就ては天照皇太神はしも天地の
底際の内に在ゝ有内る八百万千萬神の上ゝ在して
天地の間に二無く尊く高き御事も詳に伺奉り知れ
て嬉しくも歓はしくも云へば得に云知ず愛たく偉

慶〻〻なむ古事記石屋戸段に尔天宇受賣白言盈汝命而貴神坐故歡喜咲楽て有も其集給へる八百万神の中に成皇太神に勝りて尊き神の外より来給へる由に申せるなり此に蓋汝命而云こと申すい寔い皇太神より貴き神の御在し坐さるを反語に云るをも思ふ可く又其八百万神の天日の御国に始来會給へるを知べく又其衆神共に皇太神に帰順仕奉るべし事の始あるをも明〻玉可し此い年頃心に思い然もやゝ思寄つる事に有けれども今此傳を書取に隨ひて如此なむ此説い約めりける此巻此十月の六日に始て今茲に至るい十二日朝の事なり玄年安政二年十月二日の地震に家崩れ潰れ壊て職を容る計なる藁葺の怪しき小屋の中に隠住ひけるを今年庄内に往ける間に八月廿五日の大風暴雨の為に荒果たるもの物なれども未豊なる人並に家をも構り難くして家内三人の身一の置所たに無き身なりけれども神の御事の甚如此しも厚く有て神典の奥所をしも然しも今に取て出るゝ我い古に見も今に又此類容易く伺ふ方無き幸福を保つ者ありける右ハ伊勢記大神の敬命に就神等の事実の

上を以て論めゝ事あるが顕世の有状も亦正に如此ある可し天孫降臨章に于時高皇産霊尊以眞床追衾覆於皇孫天津彦〻火瓊〻杵尊使降之〻有を古事記に科詔日子番能邇〻藝命此豊葦原水穂国者汝將知国言依賜故隨命可天降〻と見えて天神の御命を負持して御天降坐る事二柱御祖神の御に次しも異あらず偖此天孫降臨章の末に久之天津彦〻火瓊〻杵尊崩因葬筑紫日向可愛之陵〻と見えたる久之い此食国天下を所知省す御世の間を申すあり若て此に功既至矣徳亦大矣〻云ふ時運に當りてい崩御し給ふ此

ハ他より云へバ唯ハ死坐るあれども其御自の上ハ
て登天報命給へるあり此ハ既ハ顕世の事ハし有
けれバ高天原より天降坐す初ハ顕身ハて御在し坐
けれども報命しハ御霊ハて天ハ登らせ給へるハ
て伊弉諾大神の御事ハ其反ある者あり上ある霊運當遷の
下ハ引る万葉二巻日並皇子尊殯宮之時歌ハ葦原乃
水穂之国子天地之依相之極所知行神之命等天雲之
八重掻別而神下座奉之高照日之皇子波云ニハ此の
御天降の御事を申せるあり天皇之敷坐国等天原石
門字開神上ニ座奴と有ハ其崩坐ハ御事ハて此の御
天降の御事を以て日並皇子尊の御事ハ云るを思合
す可し又古事記白檮原ハ然而阿礼坐之御子名云ニ又
詞志比宮段ハ渡筑紫国其御子者阿れ坐祝詞ハ阿礼坐皇

子等子毛恵給比ハ続紀第一詔ハ高天原ヲ事始而遠天皇
祖御世中今至麻豆ヲ天皇御子之阿礼坐年弥継ニヲ大
八島国所知次ハ天都神ノ御子隨母天坐神之依之奉
之隨云と有て天皇尊等の御世継の御事を阿礼坐
年弥継ニヲ大八嶋国所知次と云下して天神の御許
より次ニハ交代(カハリ)して御子と生坐て天神の事(と云事)依し奉
給へる天下を持たせ御在し坐の古語あり然れバ此
顕身の生来る本ハ天より顕るとハて其生活く間ハ
天神の御命の隨ハ功を主徳を積む事ハて人も我も
然ハ身ハ思えぬ事あらく右件云る伊弉諾大神の故

公あて有ハ御子の生れ給ふを両礼坐と申せるハて言意ハ天神の御方より顕出し給ふ由あり

事瓊杵尊の御迹ハ少しも違ふ所無き者あり此事
傳七十二ハ已ハ云ハ然ハば天雲の八重掻別て天降
り御在し坐るも人胎より生出るも其事の出起る所
ハ一あるか故ハ伊弉諾大神の如く御霊を留めて顕
身あゞ〳〵登天報命し給へるも瓊杵尊より以来人
世と成てハ顕身ハ死坐て其御霊の登天報命し給へる
も相等しきか故ハ古より崩御の御事をも神上理坐
マハ云傳たる者ハて此亦人間より云出たる事ハい
有べからず顕世と成ハ成ハるも御天降の當昔ハい
多くの神等の登降し給ふ常ありけれハ其有る状を

△明石ハ故院唯御在し坐し状あゞら立給ひて云こ我
如此悲しゝを完ハ命見忘れハ知と驚ろを聊ハ神語ハ
へりと辰れハ思ひ出ハ
▲若菜下ハ中宮の御事せ文も且ハ嬉ハ面ハ辱と
天翔りても見奉れと道思ハ思ハ感ハ者ハ上ハ
思さぬハや有ハ總ハ心ハ
給ひむ状思し合すらハ新ハ心神若登ハ御有状其
翔りても如何ハ見給ふらむと推量られて寄生
悲しき事ハて此世ハ残ハ可きと
を天翔りても斯やうなる
職ハ伊波比奉ふ天
春秋ハ永世ハ神
敗ハ仕奉ふ志と其ハ
を神ハて祝ひ奉ふ
給へる事と近なる
侯建命の崩坐を
於是ハ八尋ハ白智鳥
天向濱ハ飛行ハ
御皇ハ天ハ坐ハ

小見之来ハ魂ハ行ハ寺ハ物ハ
大合報麻虚ハ御魂を聞ハ戸申ハ宣ハ麻と有ハと皆其霊の上天ハ参ハ非ハ以ハり又其天や何方ハ

しも神語ハ語ハり傳へ
ける猶傳七卷二百七十ハ云る死生ハ説ハる顕見蒼生ハ事
説ハる顕見蒼生ハ事ハ登天報命ハ事ハ至てハ
人ハ死れるも其霊ハ
成る事ありけり傳ハ五十
ハ弓削皇子薨時歌安
坐乃天宮尓神臨神等座
者云こゝ詠る是ありり又二十七日並皇子尊殯宮時歌天
原石門乎開神上ニ座奴一云神登座尓之可婆有も其御霊の
天ハ参上給へるを云ハり又三十三日高市皇子尊殯宮時歌

事瓊杵尊の御迹ゐ次しも違ふ所無き者あり此事
傳七十二ゐ已ゐ云ゆ然れば天雲の八重掻別て天降
り御在し坐るも人胎より生出るも其事の出起る所
ハ一あるか故ゐ伊弉諾大神の如く御霊を留めて顕
身あゞ〻登天報命し給へるも瓊杵尊より以来人
世ゑ成てハ顕身ハ死坐て其御霊の登天報命し給へる
も相等しきか故ゐ古より崩御の御事をも神上理坐
マハ云傳たる者ゐて此亦人間より云出たる事ゐハ
有べからず顕世ゑハ成たれども御天降の當昔ゐハ
多くの神等の登降し給ふ常ありけれハ其有る状を

見なり知なりける神等の然しも神語ゐ語り傳へる
わたる古言ゑあむ思しらりける猶傳七卷二百七十二丁ゐ云る死生の説ゐ
校合せ又十四卷百五十五丁ゐ説たる顕見蒼生の事
をも思ふ可き者あり殊ゐ此登天報命の事ゐ至てハ
人の心の安ゆを知る甚然れば人の死れるも其霊ハ
こ太切しき事あるあり
天宮ゐ神登り復命して神ゑ成る事ありけり傳ハ五十
四ゐも已ゐ引たる万葉二三十六丁ゐ弓削皇子薨時歌安
見知之吾王高光日之皇子久堅乃天宮尓神隠神等座
者云こゑ詠る是ありり又二十七丁日並皇子尊殯宮時歌天
原石門乎開神上こ座奴一云神登座尓之可婆ゑ有も其御霊の
天ゐ参上給へるを云ゆ又三十三丁高市皇子尊殯宮時歌

の短歌ハ久堅之天所知流君故尓と云ハ我王者高日所知奴と有ハ天日の御国ハ御霊の参上坐るを云なり

三五十七丁 安積皇子薨時歌ハ和豆香山御輿立之而久堅乃天所知奴礼とも吾王天所知年登不思者ありと有も皆右ハ同上（其霊ハ魂の天ハ上る謂ある證共なり）近くハ百練抄ハも寿永二年六月十二日條ハ近曽祭主親俊奏法皇云夢想云参神宮平伏庭上父親定并親章卿（両人過去者）在堂上以親定傳仰云於我者令向天宮給畢云と有て過去し人の霊の神宮ハ仕奉り天宮ハ参向ハ事を明らめ暁る可し（又此ハ就て思ふハ）万葉二巻天武天皇崩御の後ハ夜夢裏習賜御歌ハ明日香能浄御原乃宮尓云こ神風乃伊勢能国者云と味

凝文尓乍高照日之御子と有る御歌ハ天皇の崩御し大御霊の皇太神の大御許ハ侍ひ給ひて神宮ハも天宮ハも御在し坐を所知し坐ずて世の列しハ御齋曾と云ふ佛事を行給へるを不足ぬ事ハ思ひて斯ハ御誨ハ有ける可し斯れハ神ハも御在し坐せ人ハも有れ此顕国ハ生来る事ハしも傳て巻の首ハ委しく説成るゲ如く天神の御命を負持て此漂在る国を修め理の固め成す事ハし有けれバ此世を終て後ハ必上天ハ報命しハ参上り乍も其生涯立なりし功を以て徳と為して世ハ霊幸ふ神と成る可き皇祖天神の神隨る神道なる者なり然れども其ハ正しき神又善しき人の上ハ在る事ハころうハ有けれ縦や天神の御

事持て生出たりて其功も無く亦其徳も勿ろさう
む人いしも豈死りたりとも豈天神の御許に報命し
奉ほに参上る可しやハ淡路の幽宮より勅許を賜
ハるべき事なれバ然る徒ごろハ傳十二百二十一
丁二百五十
二に説たりし如く終に疫神禍神の禍に落て疎び荒
ぶる小鬼と成り沈む事なりけれバ返こも皇祖天神
の神道を神習に習奉よりの外無き事なりけれ云ふ神
道と云者ハ經世治国の大道にして古今万国に在と
有ゆる人と有る者の生の始より死の終に至る迄に
須臾も離る可らざる神隨の道なりけれバ知ず知
ずも其道の中に居て遁る可らざる神道なる者か
り傳七卷七丁に且説明らめ
云る事共を考合せて味ふ可し○日之宮ハ傳三六丁

四五十
四丁に已に註せるが如く日ハ天日を云ひ宮此
倭柯美野と有ハ別宮と云事にて天日の外に異なる
天宮の有る是なり偖伊弉諾大神の此顕国に鎮坐す
宮の主こしきハ淡路なるも近江なるも亦其他に在
も多賀宮と申すハ天上なる日之宮の大神と天
神に復命し給ひて後ハ其に留宅給ふが故にして多
賀ハ高にて天の最上なる處に御在し坐す由の名な
り此ハ神典に天底と云ひ西蕃に天極と云所にて
謂ゆる別天の中に在る幽宮の称なる者なり天極ハ北極に
て天家に紫微宮と云なり其に天皇太帝星と云も有
ハ即其神伊弉諾大神に御在し坐れバ和漢の古説亦

相符へる者と謂つ可きなり然るハ此日之少宮ハ一も日宮なるべ
る證ハ天石窟隱の時ハ已ふ天ふ登り坐て後の事ふ
れども其事ふ係列ハせ給ずず古語拾遺ふハ却りて
其時の事をバ高皇産靈神會八十万神於天八湍河原
議奉謝之方と有り又御天降の御事ふ至てハ天忍穗
耳尊の御為ふハ大御祖父と御在し坐せバ共ふ其事
ふ預らせ給ふ可きふ御紀ハ更なり他の古書中ふ一
度だふ加へり給へりし御事迹の非るハ日宮ふハ素
より御在し坐さるが故なる可し如此く此より彼よ
り其論ひを約る時ハ日之少宮ハ一も天上の最上な

倭姫命世記ふ采皇天之真殿命移日之宮之宮基造伊勢両宮之ひ

りける高き域を指云ふ事決き者なりし然るを神宮の御鎮
座次第記ふ日神留宅於日之少宮と云るなど天地の
消息をし何も知ざる人の言を設作れる者なり日神
ハ日宮ふ坐て六合を照臨坐せるを何ぞ殊更ふ少宮
ふハ住せ御在し坐べき又外宮儀式帳ふ所見なる雄
略天皇へ御夢ふ誨奉給ひし事を倭姫命の事ふ取拵
へて皇太神宮如天之小宮坐ふ天下仁志天毛一所耳
坐云云と云るなどハ殊ふ拙し天之小宮と云事何れ
の古書ふなりハ有る皇太神ハ上天の主宰ふ御在し坐
すや天之大宮ふなど偽なりハ似著ハしくも有べきふ
餘ふ義理を取失たる妄言なり御鎮座傳記（倭姫記）ふ右ふ同
じ止由氣大神復昇於天上氏日之少宮座矣と有ハ此
御紀の文を掠め作れる妄言なりて取ふ足ず又皇太
神御鎮坐の所ふ猿田彦神の現れて從天上投降坐志
天之逆大刀逆鉾金鈴五十口日之少宮之圖形文形等
是也と奉れる下ふ選造日之少宮也と有も妄なり
日之少宮ハ右ふ説る如く伊弉諾尊の宮所ふなり有
けれ日神の宮殿を其擬せると云も且て無き事なり

又上代本記ハ外宮御鎮座の事を云るハ還幸山田原之新宮奉鎮御船代御樋代之内以天衣奉餝之加日少宮儀也と云ひ細書ハ樋代則天ハ宮日座儀也と云るも得有まじき偽ふり凡て両宮の御事ハ日之少宮を引附たる者ハ何の據も無き妄作ふりうし故思ふハ登天報命ー給ひて留宅の御在ー坐す日之少宮ハーー實ハ皇祖天神の幽都ハーー有けれバ八百万千万神と申せとも容易く至給ふ可き思ふハ非りけれども伊弉諾大神の御徳殊ハ大ハ御在ー坐う故ハ無上き至尊き御位を得て其宮の大神と成ーせ給へりける古傳とふむ伺奉らるく事ふりけ然れバ日太神の所知看す高天原ハ顕世の如く御父大神の神積り坐す日之少宮ハ幽世の

ふる可き事能ニ此の御事實ハ照ーて明らの奉る可ーー然るハ其始天神の御命持て天降坐ー時ハ隠身ハて御在ー坐うバ其ハ復らせ給へるふる可ー偖此日之少宮の事を釋記口訣纂疏ふどを始め其餘の諸書ハ云る事共悉ハ當らず故記傳七巻ハ私記ハ日之少宮是東北方之地少陽之宮即近江國犬上郡多賀之宮正値此方則是近江之宮也と云るハ此記と強て引合せたる者ふて非ふり東北方少陽ふど云るも古意ハ非ず日少宮ハ天上ハ在る仍留の二字ふて著き者をもと辨ーれたるが如ー猶云ハ淡路と近江とハ同ー国土の内ふり然るを天ハ登るとハ爭て云む又近江ハ何れの神の御在ーー坐て其ハ報命ー給ふこと為む中古の人も斯る漫言を吐て人を欺く事ハ能為たりけり ○留宅ハ皇祖天神の御許ハ参到り坐て報命ー訖て然後ハ日之少宮を常宮とーて留り住せ給ふを云て此ハて一段の落著く所ふり偖留宅の宅

△天孫降臨章ニ因留住ト曰ヒ其第四ニ書ニ故天孫留住彼處ニ

△此留宅の事傳二十二卷二百三十八丁ニ云リ考合すべし

字ハ須美多麻比伎と訓べし海宮遊行章第三ノ一書ニ

留住海宮已經三歲其第七ノ一書ニ具申事之本末因留

息焉などの例なり宅字神武天皇御紀光宅と有る

義なり名義抄ニ伊閑とも伊閑世理とも須年とも表

理とも冨志伊麻とも訓れば須美多麻比伎と訓て

難無き所なり○伊弉諾大神の鎮坐す御社の物ニ所見

なるハ神名式ニ大和國添下郡伊射奈岐神社大月次新嘗

清和天皇實録ニ貞觀元年正月二十七日甲申奉授大

和國從五位下伊弉奈岐神從五位上と有る是なり葛

下郡伊射奈岐神社城上郡伊射奈岐神社合せて同一

國の中ニ三所御在ノ坐すハ必所由有ぬ可き御事ニ

り式云葛下郡なるハ下枚村と云ニ在て今五社と申

す其古き宮趾忍山と云ふ山の東ニ在と云り又城

上郡なるハ柳本村ニ在て今三輪の社と云と云り然る

ニ添下郡なるハ大社の列なるニ今詳なるぬか遺憾

きハ何れかなる八幡宮と云天神社

と申す中ニハ必在ぬ可きなり若くハ天神の住宅

りノ宮所なるの趾なるニハ非ざる傳十六ノ七丁ニも已

ニ說る如く四神出生章第六ノ一書ニ至於火神軻遇突

智之生也伊弉冉尊見焦而化去于時伊弉諾尊云ヘ哭

泣流涕焉其淚墮而為神是即畝丘樹下所居之神號泣

澤女神矣と有ハ神名式ニ十市郡畝尾都多本神社鏡敬

と見えたる是なるゲ此文を以考るニ大神の哭泣給

へる御淚墮て直ニ其處ニて神と成れる趣なり此を

以て其ハ大和ふての御事明らかなる者なり或人万葉六巻
悲寧樂故郷歌ふ八隅知之吾大王乃高敷為日本國者
皇祖乃神之御代自敷座流國ふ之有者と有を取出て
伊弉諾大神の宮都ハ大和なりしと證ふて皇祖宮都
考と云を作なれども當ぬ事なり其ハ一卷近江荒
都を詠るふ玉手次畝火之山乃橿原乃日知之御世從
阿礼座師神之盡擦不乃弥継嗣ふ天下所知食之乎と
有ふ等しく神武天皇より以来大和ふ大宮敷坐り
事を云るなれバ伊弉諾大神の宮都の方人ふハ成ま
じき者なるをや　又神武天皇三十一年御紀ふ昔伊弉諾尊自
此國曰日本者浦安國細戈千足國磯輪上秀真國と云
事有り此目給へるし外より見行し坐て號給へるふ
ハ有べからず此域内ふ住試ミさせ御在し坐て信ふ
然る狀を宣ひ舉させ給へる御事と所思ゆるるり故

此ふ日本と宣給へるハ大八洲の揔號なるふも非ず
一國の號なるふも非ず和名抄郷名ふ城下郡大和保於
夜末と見えたる是ふて香山ふも程遠らず況て城
上郡なる伊射奈岐神社をや然れバ此邊なむ大神の
宮居敷しく跡處なるふハ有べき但右の大和郷ハ和名抄ふてハ城下郡
ふハしハ有れども神名式ふハ山邊郡大和坐大國御
魂神社三座並名神大月次相嘗新嘗と有れバ古くハ
山邊郡の内ふ〇神名式ふ若狭國大飯郡伊射奈伎神
社有り其祭來る所由未思得ず強て思ふふ淡路國よ
り勸請れるふも有べし然思寄れる故ハ政事要略ふ
載れる高橋氏文ふ六儁命乃御魂乎波膳職ふ伊波比奉

天云〻子孫等乎波長世遠世乃膳職乃長止毛上總國乃長止毛淡路國乃長止毛定天云〻和加佐乃國波六鳥命ふ永久子孫等可遠世乃國家止為止定天授今賜比支と有て淡路と若狭と其ふ就て由有るを津名郡物部郷ふ上内膳村下内膳村と云も有を思ふふ膳臣ハ一も若狭國ふ住て淡路國の長をも兼たり一故ふ其國の一宮ふ坐神ふれバ本國ふても祀奉りけむとゞ所思えたる類史ふ高野天皇神護景雲二年二月癸巳勅准令以任内膳司者為奉膳其以佗氏任之者高橋安曇二氏任職員令ふ内膳司奉膳二人と有れバ宜〻各為正と有り職員令ふ内膳司奉膳二人と有れバ古より二氏ふて仕奉れり一ふり然れバ右の内膳村正しく高橋氏ふ由有り又淡路國津名郡郷名ふ都志和名豆之と有を若狭国大飯郡静志神社式ふ見えたる也故有る事ふや又神名式ふ出雲国出雲郡阿須伎神社と有る並びふ同社神伊佗那伎神社と有て同社須佗袁神社ふども所見なり其阿須伎神社ハ味耜高彦根神ふ渡ら也給へバ其御曽祖父神ふ御在一坐を以て神代より然崇奉ら也なりけむ但御祖父素戔嗚尊ハ一も伊弉冊大神ふ爲奉給へる由緒有れバ式文の表ふて ハ何座と ハ無れども若くハ陰陽二神共ふ並鎮り坐ふハ御在しう風土記ふ阿受枳社と見えて並在神祇宮と有ふ同社共ふ社有れども何れを其と今辨ふ可き由無れバ今神名式の次第を以て推當るより外無て此社逗堪村ふ在て阿式大明神と申一て一社ふ合登れりと云り ○伊弉諾尊伊弉冊尊二柱を並奉れ

る八神名式ニ近江国犬上郡多何神社二座と有る是
なり其由已ニ傳十五百二十四丁ニ云り猶又式ニ攝津国嶋
下郡伊射奈伎神社二座並大月と有ハ必陰陽二神を
祭奉れるなり清和天皇實録ニ貞觀元年正月二十七
日甲申奉授攝津國從五位下伊射奈岐神從五位上と
有り其由来今知べからず和名抄ニ嶋上郡高上郷有
志ニ一座在山田庄小川邑今称五社一座在狭井寺村
称春日とされバ二座とハ申せども同地なハ並御在
ニ坐ざるかなり　○同式伊勢國度會郡伊佐奈岐宮二座伊佐奈弥
命一座並大月次新嘗　見ゆ太神宮式ニ伊佐奈岐宮二座去太神宮北三
里　伊弉諾尊一座伊弉冊尊一座と有て諸別宮の第二

ニ在り右諸別宮祈年月次神嘗等祭供之其宮別各丹
人二人其一人用八位以上并蔭子孫物忌父各一人と有て太神宮ニ
亞て崇敬奉らせ給へる神ニ坐り此ハ皇太神の大御
父母神ニ渡らせ給へバ實ニ然有べき御事なり然る
ニ祝詞式ニ荒祭宮月讀宮ニも如是久申進止宣と有て
此宮の御事見えず皇太神宮儀式帳ニも月讀宮正殿
四區之中此一称伊弉諾尊次称伊弉冊尊以上奈良朝
延御世定祝次称月讀命云ニ次称荒魂と有ゞ如く共
ニ月讀宮ニ摠祭らせ奉給ひけるなり右の奈良朝延
御世定祝ハ光仁天皇御紀ニ寶亀三年八月甲寅是日

異常風雨技樹發屋ト也伊勢月讀神爲祟於是毎年九月准荒祭神奉馬又荒御玉命伊佗奈岐命伊佗奈弥命入於官社と有る是る斯れば月讀尊の荒御玉命と共ハ月讀宮の相殿ハ御在り坐けるを其時ハ官社ハ被定たりけむが其境内ハ御在り坐りしくバ別ハ一宮とハ立ざりける者るを可し因云究めて神の御祟の甚しき時ハ斯る事も必有る者と見えたり此近き年頃ハ天災打續き年ごの大地震るふどハ古ふも例無き程の事ハて闕東の国ごの破損何計と云も盡さしざる計るり然ハ今年八月廿五日夜の事るりしが東南の風激しく吹出たるハ暴雨さへ打添たるハ神鳴り霆めきて亥時計すり弥強く殿舍を傾け家居を仆し大樹を打折り草木を吹拔き海潮沂りて市中を浸し潮水雨と降て諸物を損ね人畜鳥獸の死する事其數幾許とも知べうず西ハ伊豆駿河を限り北ハ下野常陸ハ畢る世の痴者ハ唯風雨の爲と耳思ひて天譴るる事と ハ心も著ざりけるころう痛ましけれ年ごの天災ハ觸て ハ其起る本を知て始より殊に神祇を敬奉り朝廷を仰奉り女こしく佞けたりし戒心を改たくむハ其狹も止ぬ可きを天下の財寶ハ鹽硝と成て雲中ハ消え山野の巨村ハ大船と成て水中ハ朽る世中かりけれバ終ハ曉る世勿くむると此頃武士の容儀の胡俗ハ成變しるを見れば見るも聞くも汚穢ハしく我さへ思ゆるを況て神祇の御心ハ如何ハ醜めく思ふ一齋給ふ也 清和天皇實録ハ貞觀九年八月丁亥朔勅伊勢国伊弉奈岐伊弉奈弥神社改社称宮月次祭并置内人員と所見たる此時より改りて伊佗奈岐宮月讀宮と次序奉る事とハ成れるる可し倭姫命世記ハ靈御形鏡坐と所見たり然れバ二柱御祖神を齋奉

れる宮の天下に甚尊きは此宮に勝れるは非るべ
し猶此御宮の御事に就ては申顕はし奉る將欲しき
事多在れども先に祝詞講義を著述はしく時に已
が心の限り云述なれば○神名式に淡路国津名郡石
屋神社傳六三十丁 磯馭盧嶋條に粗云る如く本國の西
北隅にして來馬郷岩屋浦と云有り其地に御在し坐
す天地大神宮と申す御社決く是なり但今俗に石屋
神社と云は磯馭盧嶋に向ひて陸の方五十歩許に大
なる石窟有り其前に拜殿を建なり此を石楠大明神
と申せる寔に岩屋浦と云ふ地名も其に據て起れ
ば石屋神社と心得むも一應りは然る事の如く聞成
るれども強に然は定むすべき由無ふは非ず其は石
の磯馭盧嶋は二柱御祖神の國生坐し始に見立給へ
りける天柱國柱なり有ければ其嶋には祭らずとも
必近傍に其大神等の宮居は無して其巖窟の靈を
宮社なりて祭らるべき理なるを思ふに其の石楠
大明神と申すは其窟に就たる神の小祠なる者なり
石楠は御紀の般若樫樟船を思寄せて蛭兒を祀れる由
に云るは殊に據無し蛭兒は蛭夷嶋の事なりて神に
非る事傳六七八の巻に辨たるが如し故思ふに其
石窟と成れるは若く楠の化石なりしに依て
然も云傳へたるなりや此所の石に名高き事は神功皇
后御紀に乃詳為天皇作陵詣播磨興山陵於赤石仍編

右船運于淡路島運于島石而造之と有り其赤石の山陵と云は明石郡垂水村碑

ふゝ抱越しつゝ可き程の近き渡ゝして其間半里余と見ゆるを名ふ負ふ赤石の迫門ふて潮行の疾速が為ふ船の後ゝ引く事も有を以て其渡を一里ふ立る事と云り岩屋の地名の本著く所右の巖窟ふ依れりと雖も實ふ石甚然れバ石屋神社と申すハ其石窟ふ神社多き地ゝり然れバ石屋と云地ふ祠奉る神社と申す義ふと云ふハ非ず石屋と云地ふ祠奉る神社と申す義ふる可し其天地大明神ハ土俗今も御多賀様の本家ふゆと云傳ふる耳ゝ近江の多何神社ふも然る傳も有と見えて石燈籠ゝを奉れるも有り多賀ハ世ふも聞えたる大社ゝを然計ゝぬ此社を崇奉れる事必然る傳共の有ふ非れバ思企すべき事ゝを思ふ可し偖大神貫道が磯馭盧嶋日記ふ其祭神を

國常立尊伊弉諾尊伊弉冊尊三座ゝる由記せるが來しくて予幼く其社ふ詣て遍く質問したりしども唯天地大明神ふて御多賀様の本家と云耳ふて何の事も分明しゝざりき其岩屋浦と云地ハ家數凡千所ふハ有れども多くハ商客と漁人耳ふて然る事ゝを雜へたるハ非ず其天地大明神も大社ふてハ有れども所の産土神ハ八幡宮ふて別ふ在り神主社僧ゝども無く女巫の家有て世ゝ其大神ふ仕奉る耳ふれバ其家ふ求めて然れバ貫道が臆説ゝと思ふふ然ても知ずと云てき然れバ貫道が臆説ゝと思ふふ然しゝず天地と云ハ陰陽の義より云出たる社名ゝる可く思ゆれバ實ふ二柱御祖神を鎮奉れる御社ゝり然れども所祭ハ三座ふ違ひ無れバ其國常立尊と申す

八八洲起元章ニ便以磯馭盧嶋為國中之柱と有れバ
其國中之柱の靈を祭れるゝて傳六四十八丁ニ説たる如
く私記ニ即以其矛衝立此嶋為國柱也と云文も有れ
ハ其矛を衝立て國柱と為給へる事より國常立尊と
ハ申傳たるゝも有けむ其神を中ゝて左右ニ二
柱御祖神の御在ー坐す事右ニ引る為國中之柱と有
る文ニ續きて陽神左旋陰神右旋分巡國柱同會一面
と有ニ符ひて靈ー き迄能合へるを思ふ可ー 上三十八丁ニ
引る漢家ニ謂ゆる昆侖山の古傳ニ蓋帝之下都聖仙
之所集と有をも思合す可ー其昆侖ハ我が磯馭盧嶋
ゝる事ハ已ニ傳 然計り此ニ所祭の三神の御事御紀
六巻ニ云りき

の古傳ニ露も違ふ所無く相叶へる耳ゝず其磯馭
盧嶋ニ相傍て斯る宮所の御在ー坐す御事信ニ正ニ
然有べき上ハ右の石屋神社ゝむ此天地大神宮と申
すニ究まりける古ハ甚く御榮え坐くけゝー海
を隔てる播磨國明石浦ニ岩屋大明神と申す御社立
せ御在ー坐すニ例祭六月九月十三日の祭ニハ海を
渡りて淡路の本宮ニ神輦有けるを大るゝと云魚
の人を追ふと為ける事の有ーうハ今ハ海濱ニ神輦
成奉る事と成りと云り然れバ古榮給へる程ニ其
遥宮として明石ニハ祀奉りける可ー又其六座

昌平坂學問所
消印
内閣文庫

の御事を面足尊惶根尊伊弉諾尊伊弉冊尊と云るも
右の天地大神宮ハ倍したる傳ふて其此社を岩屋大明
神と申すゝハ此ふても石屋神社と申せるゐむ天
地大神宮ゐる事決めて違ひ有まゝ思得定うしれけ
る又天地を夫婦の義ゐ取る證ハ天御柱命國御柱命
ゐで申す例も有しハ漢書尊ふ天地大神宮と申奉る事
も其所謂無きふハ非ず赤縣太古傳三皇紀ふ三皇と
ゐ天皇氏地皇氏人皇氏の事ゐるゐ其天地の二皇ハ
歸妹の神ふて人皇氏ハ其子ゐゐり偖天皇氏を天靈
と云ひ地皇氏を地靈と云る其ハ決く我が伊弉諾尊
伊弉冊尊と申奉ゐるゐ可く其ふ就て人皇氏ハ素戔
嗚尊ふ御在ゝ坐べき由ふ云れたるハ實ふ然る言ゐ
り此ふ石屋神社を天地大神宮と今申ゝ奉れるハ然

国立公文書館
National Archives of Japan